
学校戦争！

ビフィズス菌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校戦争！

【Nコード】

N1885Y

【作者名】

ビフィズス菌

【あらすじ】

この世界は力こそが全て。

力なきものは力あるものに従わないといけない世界。

そんな世界を生き抜く紅蓮と愉快？な仲間達は

戦争をしたり、恋愛したり、化け物と戦ったり・・・

とにかく壮絶な戦いを繰り広げていく。

少年紅蓮は一体どうなってしまうのか！？・・・

感想・評価等お待ちしております！！

NO・1(始)「ようこそ光中へ!!」

この世界は、力こそすべて。

力なき者は大人だろうと子供にいじめられる。

力持つ者は小学生でも大人同等の扱いをされる。

そう、ここは力だけが全ての軍事学校なのだ!!

そして、年に1度この世界のたくさんの軍事学校が戦い頂点を決める「エキサイト・バトル能力決闘会」が始まるのだ!

これはその戦いを生き抜く1人の少年の物語である・・・

「やばい、遅刻!」

「ご飯食べてきなさい!」

「いいよめんどくさい。いつてきますー」
「素晴らしい紅蓮くれんは学校へと走り出した。

紅蓮は今年、光楽第一中学校(光中)に入学する中学一年生である。光中は、能力決闘会に向けての能力開発に力をそそいでいる中学校で倍率も高く、普通は100人に1人ぐらいしか入学できない名門だ。

しかし特殊な例があり、すでに能力の使える能力者エスパーだと、一発で入学できる。

そして紅蓮は能力者なのだ。

キーンコーカーン

「ふう。ギリギリ間に合った〜」と俺は言っただけであいてる席についた。と同時に、ゴリマッチョな先生が入ってきた。

「全員いるな? よーし今から体育館に集合!! これより能力測定を

行う。

能力測定でレベル別にクラスを編成するから真剣に行うように！
あーいい忘れてた。私の名前は鬼瓦おにがわらつとむ 勉とむだ！宜しく！！」と言うと
ゴリマツチヨは一瞬にして消えた。どうやら彼の能力のようだ。
それと同時にぞくぞくとみんなが教室をでていく。

「んじゃ行きますかー」と言い俺は体育館に走りだした。
この能力測定がものすごく大変だとも知らずに・・・

NO・i(始)「ようこそ光中へ!」(後書き)

なんかよくありそうな話でなりません……

これからもがんばっていくので感想・アドバイス等お願いします!

NO.2「能力測定」

「ここが体育館か・・・」と俺は支給された学校の地図を見ながら言った。

その時、さっきのゴリマツチヨな先生が

「みんな集まったな！では能力者ではないものはここに残り学力テストだ！」

このテストでクラスわけをするからしっかりと取り組むように！

能力者はグラウンドでLEVELチェックをする！説明はあつちで行うからグラウンドにくるように！」

といい、また瞬間移動した。

「やれやれまた移動か・・・」と俺は思いながらグラウンドへ向かった。

「みんなついたな！これよりLEVELテストを行う。ルールは簡単。

ここにある重さ1tの鉄球をできるだけ遠くにとばせばいい！ちなみにこの鉄球は能力の威力を吸収して動力にエネルギー変える性質があるから能力を使って投げる遠くへ飛ばすことができるぞ！

つまり、強い能力が使える者はよく飛ばすことができるということだ！それでははじめ！」

とゴリマツチヨが言った。

「なるほど。能力をつかえばいいのだな。」と身長2m50cmくらいの巨大な男がいった。

「では投げるものから名前を言って投げる！」

「俺の名前が後藤 剛ごとう 剛だ！いくぞ！」と巨大な男がいい、

「こんなもの能力をつかうまでもない！！」と叫びながら巨大な鉄球を持ち上げてほうり投げた。」

「記録は……23m!! なかなか記録だ!」とゴリマッチヨはいった。

それからたくさんの人が投げた。だいたい記録は15〜18mあたりで終わっていたが、

高校生くらいの青い髪をやつと俺と同じ年くらい女の子と見た目がヤバそうなやつは全員26mくらいとばしていた。

「そろそろ俺の番だな……」と思いながら俺は投げる時をただただ待っていた。

そしてその時がきた。

俺は深く息を吸った。意識を右腕だけに集中させる。

すると、右腕を炎が包んだ。そう、俺の能力は炎をだすことだ。

そして勢いよく鉄球を殴った。すると炎は吸収され、鉄球が勢いよく飛んだ。

「記録は……23m!! 能力の使い方がうまいな!」と褒められた。

しかし、後藤という人物はこれを能力なしでとばしたんだ。一体どんな体をしているのだろう。

俺はそう思いなが全員が終わるのを待っていた。

そしてゴリマッチヨが「よし、テスト終了! では次にこの記録を参考に勝負をもらう!!」

トーナメント式だ! 勝ち残っていけば上位クラスにはいることができ、負けたらもちろん下位クラスにはいることになる! 上位クラスにはいりたかったら勝ちのこれ!!」といった。

「今度はガチでいかないといけないのか……」俺は少々不安になった。

なぜなら記録が近いものどうしが当たるとすると、俺はさっきの恐ろしいやつをあたることになるからだ。

一体俺は当たるのは誰になるのか? そして、あいつの能力がどんなものなのか?

という2つの疑問を気になったまま俺たちは戦闘専用室へと向かっ

て
い
っ
た。

NO.3「クラス分けトーナメント」

「これよりトーナメントのルールを発表する！先ほどのLEVELテストで全員のLEVELを設定した！

まず1〜10m飛ばしたものはLEVEL1、10〜15mはLEVEL2、15〜20mはLEVEL3、20、1以上はLEVEL4となる！

そして同じLEVEL同士が戦う！しかし、LEVEL4はシード権があり、4回戦目から戦うことになる。

それではLEVEL1の者は第一戦闘室へ、LEVEL2の者は第二戦闘室へ、LEVEL3の者は第三戦闘室へ移動してくれ。そこで対戦相手を発表する。LEVEL4は少しここで待っていてくれ。それでは移動！」

「ここで待ってるのも暇だな・・・他のLEVEL4と話してみるか。」俺はそう思い、さっきの巨体な剛に話かけてみた。

「おう、お前能力使わないであんなに飛ばしたのか。スゲーな」

「昔から鍛えていたからな。お前、名前は？」

「俺は紅蓮だ！お前は剛って言うてたな。宜しく！」

さてと・・・次は同年代くらいの女の子か

「ねえ、お前年いくつ？」

「ん？13だよ！」

「やっぱり俺と同じか！俺は紅蓮。お前は？」

「佐藤 姫だよ」

「そっか、宜しくな」

俺は、他のやつにも話しかけようかと思ったが、他のやつは誰もよせつけないような雰囲気を出していたので近づけなかった。

しばらくたったあと、「待たせたな！これから4回戦目が始まる！それでは対戦相手を発表する！」

ここの紙に書いといてあるから見とくように！10分後に第一戦闘

室に集まるように！」と先生が言った。

「俺の相手は……剛だと!?」俺はかなり焦った。

「どうやら俺らが対戦するようだな。悪いが本気でいかせてもらおう」と剛は言ってきた。

「もちろん俺もそのつもりだぜ」とカッコ良くいつてみたが、俺はやっぱり不安でいっぱいだった。

そして対戦の時がきた。

「二人とも戦闘準備は整いましたか？」と審判は言う。

「それでは……戦闘開始!!」その合図と共に俺は両腕を炎で包んだ。

「先手はもらった!」俺は剛の懐に飛び込み、腹を殴った。

確実にみぞおちに入った感触がした。しかし、剛には全く効いていなかった。

「その程度か……」と言うと剛は俺の腕を掴み持ち上げ、俺を思い切り地面にたたきつけた。

「ぐはぁ!」俺は背中を強打した。

しかしなぜだ? あいつは俺の腕の握ったからやけどをしてるはず……

・
一体剛の能力はなになのだろうか……

NO.4「炎vs水」

「もう一度！」俺は火力MAXで剛の腹を2発殴った。
やはり、剛には全く効いてないようだ。

俺はあることに気づいた。

剛の服には確かに焼けた後があつて服は少しやぶけているんだけど、
体は無傷なのだ。つまり、服と体の間になにかがあるのだ。それが
ヤツの能力か……

「何度おなじことをしても無駄だ！」俺は剛に殴られた。やはり、
一撃は重い。

またまともにくらつたら気絶するだろうと思つた。しかし、やるし
かない。

「畜生！」俺は服のやぶけた所を殴つた。

シューウウウウウ……

この音はなんだ……やつの体から煙がでてる……いや……
これは水蒸気だ……！！

「……水か！！」俺は確信した。

「ばれたか。よし、教えてやろう。俺の能力は水を操ることができ
る。

そして、この能力を使ってこんなこともできる！」と剛は言つと、
じよじよに剛の手の平に水の球ができていく。

ウォーター・ストリーム
「水流弾！！」やつは俺めがけてその水に球を飛ばしてきた。

「ぐはあ！」左肩を直撃した。どうやら折れてはいないが、強烈な
一撃だつた。

俺はよろめきながらも何かないか考えた。

「あいつができるなら……。」と思ひ、

俺は意識を右手に集中させた。火の球ができていく。

「これならいける！」俺は炎を圧縮させて球をつくつた。

フレイム・キャノン
「炎砲弾！」その球はやつの腹に直撃した。

「ぐう！」初めて剛はよろけた。

「まだ威力が足りない・・・」俺はどうすればいいか考えた。

・・・そうだ！あいつの水を蒸発させて蒸気を利用すると強烈な一撃がうつる！

「もう許さん・・・とどめだ！」剛はさっきのに大きい球をつくってきた。

ウォーター・ストリーム
「水流弾！」・・・きた！

俺は全身から最大火力の炎をだした。

俺の周りの火柱に水の球が当たる。そして蒸発していく。

フレイム・キャノン
「炎砲弾！」俺はタイミングをみはからいその水の球の方へ飛ばした。

水の球と炎の球がぶつかる。そして、いいタイミングで水蒸気へと気化した。

すると、蒸気の勢いで加速した炎の球が剛の腹へ刺さるようにはいった。

「ぐはあ！！！！・・・」剛は倒れこんだ。

「勝者・・・紅蓮！！」審判はそう言った。

「やった！・・・」俺はそのまま気絶していた。

そして目が覚めると保健室にいた。

そこへゴリマツチヨな先生と剛がきて、

「いい戦いだっただ。お前はこのあと5回戦目もがんばるんだぞ」と先生が言った。

・・・剛より強い奴と戦うのかと思った。

まだ左肩は痛い。そう思っていると剛が、

「お前の攻撃、かなり響いたぞ。こんなことはじめてだ。」と笑顔で言った。

「俺、今から5回戦目行ってくるから見ててくれ」と俺は言った。

「わかった。がんばれよ」と剛は言ってくれた。

「ああ、紅蓮！これもつていけ！」と先生が渡してきた。

「これは？」「そこに対戦相手を書いてある！相手は強いぞ！気を
つけるよ！」

「ありがとうございます！」

そして俺は再び第一戦闘室へ向かった。

「対戦相手は・・・グローリア・・・」

俺はその名前に何故か聞き覚えがあった。

「まあ気のせいかな」と俺は思い、第一戦闘室に入った。

そこにいたのは・・・俺の親友だった。

そう、グローリアは俺の小学校1年生の時の親友だったのだ。

「・・・久しぶりだな、紅蓮」

NO.5 「氷の鎮魂歌」

「久しぶりだな、紅蓮」とグローリアは言った。

「なんでお前が……」

俺とグローリアは小学校1年生の時には、もう能力者であった。

グローリアと俺はよく喧嘩をしていた。

そして能力を使って決着をつけることにしたんだ。その判断が間違
いだった……

あいつの能力は氷を造ることだ。だから俺のほうが有利だった。

「とどめだ！」俺はグローリアに火を放った。グローリアは氷の盾
をつくった。

しかし、氷の盾は簡単に溶けてなくなった。

その時に俺はもう一度火を放った。すると、

「ぎゃあああ！目が！！！」とグローリアは泣きわめいた。

そしてグローリアは引越してしまった。俺が謝ることもできない
まま……

「それでは、戦闘準備はいいですか？……それでは、戦闘開始！」

「いやぁー懐かしいなぁー……紅蓮と戦うの」とグローリアは言
うと、

アイス・ニードル
「氷針弾！」と言い氷の針を手につくり飛ばしてきた。

「ぐう……！」俺の太ももに刺さった。すかさず炎で溶かす。

そして、フレイム・キャノン
「炎砲弾！」俺は反撃をした。

「そうそう、こうやって僕の目をやったんだよね。でも今の僕は違
う」

グローリアはそう言って炎の弾に触れた。

すると、炎がどんどん凍っていく。

「どうだい、じゃあそろそろとどめといこうか……」とグローリア
は言った。

「氷の鎮魂歌！」そういうと、俺の足からどんどん凍り付いていく。

「くそ！・・・くそ！！」俺は身動きが取れなくなった。

「THE END」とグローリアはいつた時にはもう俺は完全に氷と化していた。

「・・・大丈夫か？・・・」俺は鬼瓦先生に起こされた。

どうやら保健室で2日凍ってたらしい。鬼瓦先生は、

「入学式は終わってしまったが、お前のクラスはもう決まってあるから今すぐ行つて来い！

ちなみにクラスは1年C組だ。じゃあな！」と言ってでていった。

「1年C組、1年C組は・・・ここか」

俺は教室に入った。知ってる奴は剛と、姫だけだった。

「もう体は大丈夫なのか？」「心配してたんだよー！」と2人は言っ

た。「おう！ありがとうな。もう大丈夫だ」と俺は言い返した。

「俺の席は・・・姫の隣か」俺が席に着いたあとに、知らない先生が入ってきた。

「えー、これから5時間目をはじめます。えー私は、能力社会科担当の後藤です。

それでは今日は魔術と能力の違いについて説明したいと思います。能力というのは世界の東半分の人々特有のもので、比較的科学的なもの

です。しかし、西側では、東側から伝わった能力を再現する途中で偶然で

きてしまった『魔術』をつかっています。魔術は能力と似たようなもの

もあります。原理は全て非科学的なものです。えー次に能力と魔術のメリ

ット、デメリットについて説明します。能力のメリットは、体力消耗が

少なくすみません。しかし、魔術は膨大な魔力を必要とするため、より多くの体力を魔

力に変換しないといけません。
続いて魔術のメリットを説明します。

魔術は自然環境に問わず、いつでも使えます。しかし、能力は自然環境に影響されやすく、
場合によっては能力が使えない時もあります。

各種のメリット、デメリットはわかりましたか？

それでは最後に補足です。能力を持つものが魔術を覚えることはほぼ不可能です。

過去に実験されたことがあります、1000人中999人は能力と魔術が打ち消しあい、

無能力者となってしまうました。残りの1人は両方使えるようになりましたが、

その人間を能力者、魔術師のどちらにするかでもめあい、

魔能大戦争という戦争が起こりました。そのため、これ以上の実験は禁止されています。

そろそろですね、ここはテストに出るので復習しておくように「

キーンコーンカーンコーン

先生の長い授業はやっと終わった。

姫は、「やっと終わったね！ねえ3人でどっか行かない？」と言ってきた。

「面白そうだな」俺は言った。「たまにはいいな」と剛と言った。

「んじゃあ後で校門集合！」と言ってでていった。

「それじゃあ俺たちも帰るか」と言い、俺たちも家へと向かった。

NO.5「氷の鎮魂歌」(後書き)

まだまだ理解不能な文章ですが、
なにか感想・アドバイス等あったらお願いします！

った・・・

「やっぱカップルで行くなら映画館よねー」と姫は頬を赤くして言った。

「なんでカップルがリードをつけて歩かされてるんだ？」

「・・・これは運命の糸」「無理ありすぎるだろ!!!」「と剛はナイスツツコミをした。

その横で俺は、

「剛に負けた・・・剛に負けた・・・俺も彼女ほしいな・・・」と嘆いていた。

すると姫が、「そんなにほしいなら・・・ウチがなつてあげようか?・・・」と言った。

俺はそれを知らずに「わゝガンムだ!!!かっこいい!!!」と言つてると、

「聞けやゴルア!」と背負い投げをくらった。

バキッ!・・・あれれおかしいなあゝひじがまがらないぞ??と思いつつ俺達は映画館へと向かった。

「どの映画みる?」と姫が聞くと「・・・コレ」と中島さんが指さした。その映画とは

「・・・生きた豚を殺す祭り・・・だと!?!」

俺と剛は恐怖を感じたが、女子二人はノリノリなので見ることにした。

映画が始まった。

「ぐちよぐちよ・・・ブヒゝ!!!ブ、ブ、ブヒー!」

俺と剛は「ちよいトイレ行って来る!」と言って、その場から逃走した。

「・・・ひどい映画だったな。お前も色々大変なんだな」と俺が言うつと、

「あれは序の口だ。この前なんて、爆竹で目がふつとぶ映画を一緒に

に見させられたんだぞ。それを思い出すだけで・・・ヴォエエエエ
エエ」と剛は吐いてしまった。相当壮絶なものだったのだろう。

「そろそろ戻らないとまたひどい目にあうな」「そうだな」と言い、
俺達は戻った。しかし、姫たちはいなくなっており、剛のケータイ
にメールが届いた。

「お前のとこのかわいい2人の連れは預かった。取り返したかった
ら見つけることだな!」というメールがきた。

「な、なんだと!?!?!」剛はかなり焦っていた。やはり、いくら
なんでも彼女は大事なんだろう。

「よし、探しにいくぞ!」「でもどうやって?」「いい方法があ
る・・・」

剛はニヤリと笑いながら言った。

NO.6「恋愛とは裏切られるだけだよ畜生……」(後書き)

感想・アドバイスお待ちしております！

NO.7 「愛と変態と狂気」

「いい方法がある・・・」と言って、剛はニヤリと笑った。

「俺はいつも玲に遭遇しないようにあいつの髪飾りをGPS機能搭載のものにしたんだ。

早速見てするか。」

「お前・・・変態だな」

「ちがう！俺を変態おまえなんかと一緒にするな！」

「俺は変態じゃねえ！変態という名の紳士だよ！」

「結局変態じゃないか！」と俺は剛にツッコまれた。

「居場所がわかったぞ！ここは・・・学校付近だ！」と剛は言って走り出した。

「着いた・・・」俺は息を切らしていった。

「体育館倉庫にいるようだ。早く急がないと・・・」と剛がいった時に、

ドオオオン！！というもの凄い音がした。

「遅かったか・・・早く行くぞ！！」

「まさか、二人を・・・!?」

「違うな。あの音は玲がやったもんだ。実はあいつ、俺以外の男に手を握られると・・・」

くその頃玲たちは・・・

「なあなあ、このまま殺されたいか？ぐへへへ」と変態Aが言った。

「よし、じゃあ逃げないように縛ってこつぜ。ぐふふふ」と変態Bが言った。

「ちよっとやめてよ！」「・・・お願い、やめて」と二人は言っ

た。

「よしじゃあこっちの元気な女は俺がやるぜ、ぐへへへへ」

「じゃあ無口なこの子を俺が・・・」と変態Bが玲の手を握った瞬間ドオオオンン！！という音とともに変態Bが吹き飛んだ。

「ああ！？なにきやすくさわつとんじゃボケカス！死ねえ！死ねえ！クソ雑魚やろう！！」

と、玲？は言った。

（その頃俺達は・・・）

「ふう、着いた」俺達は体育館にいた。

「ここが倉庫か・・・」俺はドアを開けた。

そこにいたのは気絶している変態Aと変態Bだった。

そこに中島さんが二人の髪を掴み、「おいお前ら土下座の一つでもしやがれクズ！！」

と怒鳴っていた。

「おい、その辺にしといてやれ」と剛が言つと、

中島さんは「・・・怖かった」といつものように言った。どうやら人格が戻ったようだ。

「それじゃあお前が心配してたのって・・・」

「ああ。この連れ去った奴らだよ。玲は心配するまでもないdsしやdあy」

剛が言い終わる前にはもう剛は地面に倒れこんでいた。

「それより大変だったのよ？もう少し早くきてくれてもよかったじゃない」と姫は言う。

「それよう俺はお前」ときでも誘拐されることがあるのに驚いたよ・・・」

「死ねボケエ！！」

俺は姫に倉庫にあったバットで殴られてそのまま気絶した。

「紅蓮！こんなところでなにしてるんだ！」という鬼瓦先生の声で俺は目覚めた。

どうやら俺は三人にとり残されたまま寝てたらしい。

「いや・・・ちよつと覚えてません・・・」

「お前今日何曜日だと思ってるんだ？」

「え？・・・土曜日？」

「日曜日だ！！なぜ日曜日に学校にいるんだ！！」

「いや、誘拐された友達を助けるために・・・」

「そんなことがあるか！！お前は・・・補習だあ！！！！！！！！！！」

「いやああああああああああああああああああああああああああああ！！」

という俺の悲鳴が誰もいない学校全体に響いた。

NO.7「愛と変態と狂気」(後書き)

アドバイス・感想等なんでもお待ちしております!!

NO.8 「電撃姫の想い」

私は佐藤 姫。今・・・好きな人がいるの!!

その人なんだけど・・・全く気づいてくれないし、私のことどう思ってるのかな？

今日はその人の誕生日！そんな私は街にその人の誕生日プレゼントを買いにきたの！

ここには色々な物が売ってるのよ！

「これなんてどうかな？」私はパーカーを取ってみた。

「これをアイツとおそろい・・・フフフフ」私は時々奇妙な子になっちゃうの!!

「よし！これにちゃおう！」私は思い切ってTシャツを買ってみた。

「よし後はあいつにメールして・・・と」私は学校前に午後7時に来てとメールした。

「まだ時間はあるわね・・・」

私はちよつと街を回ってみることにした。

怪しい店があった。私はちよつと入ってみることにした。

「ん？能力ガム？なんか面白そうね！」私は買ってみることにした。

「なになに？このガムを噛んでる20分間は能力の威力を増大させることができます。」

ただし、その後の30分間は能力を使えなくなります。使う時は気をつけてつかってください。」

私は食べてみることにした。

「とりあえずやさしい技にしときましようか・・・迅雷矢！」
ライトニング・アロー

私は雷の矢を大木に撃った。

ズギャン！！矢は大木を簡単に貫通し、車を十数台吹っ飛ばした。

「やばい！電光石火！」私は足に雷をまとい地面を勢よく蹴り急

いで逃げた。やはりガムを食べると早くなるわね。時速80kmと
いったところかな・・・

「もう6時50分ね。行かないと。」私は学校へ行こうとすると、
「おいおい姉ちゃん、かわいいねえ〜。今から俺らと遊ばない？」
とチャライやつらが30人くらいでよってきた。

「いいわ、相手してあげる！」私は軽く奴らの体に電気を流そうと
した。しかし、流れない。

そうだ。ガムの副作用だ。30分は使えないのか……。

「ねえちゃん、能力ごっこはやめにしていこうぜ？」

「ちよつと、やめてよ!!!」

無理やり私はバイクに乗せられて廃墟となった病院へ連れてこられ
た。

「さあさあ、俺達と楽しもうか!!!」リーダーっぽい奴は私の顔を
殴ってきた。

「なにするのよ!」私は睨んだ。

「いいねえ……. そういう顔!!!」私は集団で殴られたり蹴られた
りした。

「そろそろとどめといくか…….」男はスタンガンを取り出した。

「コレなんだかわかるか? ちよつと痛いけど我慢してな!!!」男は
私の首にスタンガンを当てた。

普通なら中枢神経がイカれて、もう二度と体は動かなくなるだろう。
・
・

そう、普通ならね!!!

「おいしい電気……. ありがとうね!!!」私はリーダーを殴った。

「私は電気の能力者。あんたたちも少しは聞いたことあるでしょ？」

「まさか……. ! 東京都の中でもトップクラスの実力を誇る者だけ
に与えられる『守護神』の称号を持つ『電撃姫』だと!？」

「そうよ! 今は好きな人と同じクラスになるため能力の威力を低下
させてけどね!」

「こんなやつにかてるはずはない！」

もう7時30分だ。能力はつかえるでしょう！「じゃあさっきの仕返しといきましようか！」

ライトニング・サインエッジ
「雷双刃!!!」2本の雷の刃が奴ら全員を吹っ飛ばした。

「もう9時だ・・・絶対帰っちゃったよ・・・」私はあきらめていた。

歩いてる途中涙がこぼれおちる。息もまともに吸えない。

しかし、学校前にたつてる男がいた。

「おう、遅かったな！」

「え・・・なんでいるの？もう2時間もオーバーしてんだよ？」

「なんでって言われても・・・ここにいろっていったじゃん。」

「・・・バカ」私は笑顔でそう言った。

「お前なんでそんな服ボロボロなんだ？これ着ろよ」とその人はさしだしてきた。

「いや、いいわよ！それより、君・・・今日誕生日でしょ？」

「そうだけど・・・」

「コレ、誕生日プレゼント」私は頬を赤くしながら差し出した。

「なんだ？ああ、パーカーか！ありがとう！でも二つもくれるのか・・・」

ああ！間違えて両方あげちゃった・・・最悪・・・

「ちよつと・・・着てみてよ」私はテンションを落としながらも言う。

「わかった。じゃあお前服ボロボロだし、2つもいらなからコレ着て帰れ！」とその人は言った。

「ありが・・・とう」

「よし！じゃあ帰るぞ〜」

私たちは暗い道を二人つきりで帰った。おそろいのパーカーを着て・・・

やっぱりこの人に決めてよかった！そう思った一日だった。

NO.8「電撃姫の想い」(後書き)

今回はちょっと恋愛モノにしてみましたw
w
へたくそですが、感想・アドバイス等あればお願いします。

NO.9 「開戦！！」

とうとうこの日が近づいてきた・・・
そう、なんと1週間後に能力決闘会エキサイト・バトルが開幕するのだ・・・

「えーこれから、能力決闘会の説明を始める！！」

能力決闘会は、前衛・中衛・後衛・護衛を合計7人になるようにチームを組み、

チーム同士で戦い、最終的に敵の学校の核コア・プログラムを破壊するか、

全員を倒すかのどちらかを達成したチームが勝利するという大胆な戦争だ。

勝利チームには、能力理事会から施設の設備強化をするための援助金をだしてもらえるぞ。

では、早速1年C組で7人ずつチームを作るのだ！」と鬼瓦先生は言った。

「なるほど。じゃあ俺と姫と剛は決定だな。後は誰にしようか・・・」
「俺はそう考えていると、

「黒澤君と、旭山さんと、下田君と、高森さんなんてどう？」

私たちを前衛にして、補助系統の能力を使える黒澤君と旭山さんを中衛にして、

後衛に、特殊な能力を使える下田君を入れて、回復系統の高森さんを入れたらどうかしら？」

「バランスもかなりいいと思う」と姫は自慢げに言った。

「なるほど。旭山さんは結構かわいいいな」

「ここにかわいい子がいるだろゴルア！」

俺は腕の関節技をきめられた。

「痛い痛い痛い痛い冗談です嘘ついてすみませんでした」

「わかればよし！」

「おい、そんなことより、誘って見ないか？」剛は言った。

「わかった。姫は旭山さんと高森さんを誘って、俺と剛で黒澤君と、下田君を誘おう。」

そう俺は言い、2人を誘いに行った。

意外と簡単に7人が揃った。

「で、一体どうするの？」高森さんが言った。

「よし、じゃあまず全員の能力を教え合おう。その能力で作戦をたてよう。」俺は言った。

剛「まずは俺からだ。俺は水系統の能力を使える。そして、長所はパワーだな。」

姫「次は私。私は雷系統の能力が使えるの。スピードには自信があるわ！」

旭「私は、光系統の能力。相手を視界を奪うことが得意よ。」

黒「僕は、幻覚を見せれるよ。だますことなら任せて！」

下「俺は、相手の情報を調べる能力だ。役に立つといいが。」

高「ウチは回復能力やで！回復はまかせてほしいわ！」

紅「最後に、俺は炎系統の能力だ。炎を使ってポップコーンがつくれるぜ！」

全員「そんなもんいらねえよ！」

紅「え・・・」

「さてと、作戦を立てましょうか」俺は言った。

「なら、最初に旭山さんが時間を稼いで、その間に下田君が情報を調べて、

それにあわせて私と紅蓮と剛で攻撃して、それでも倒せなかった時は黒澤君の幻覚で、

傷ついた人がいたら高森さんの回復でカバーしていきましょう。」
と姫は言った。

「よしその作戦で決定だな！じゃあこれから一週間どうしようか・・・」俺は言った。

「じゃあ今日から各自新技を用意するのはどう？」旭山さんは言った。

「おお、それはいいな」剛は言った。

「よし、じゃあ今日から各自トレーニングで！」俺はそう言った。
キーンコーンカーンコーン

「よしじゃあ俺も新技考えるか・・・」俺は河川敷へ向かった。

NO.10「青い炎」

「じゃあ早速技を考えるか」俺は河川敷に降りて準備をした。

フレイム・キャノン

「炎砲弾！」俺は試しに撃ってみた。しかし、スピードが足りない。

「これなら確実にかわされるな・・・」俺は困った。そして・・・ひらめいた！

「弾のサイズを小さくして尖らせると、空気抵抗も減らせる！」早速俺は撃ってみた。

確かに、スピードが上がった。しかし、石すらも貫通させることはできなかった。

「ちくしょう・・・なら近距離技を先に考えるか」俺は気を取りなおして考えた。

「今まではただのパンチだったから・・・パワーはそこまでないな」・・・そして俺はひらめいた！

「炎の噴射に回転をかけるとぶつかった部分をえぐるように体に入っていく！」

フレイム・ドリル

「炎旋削！」俺は大きな石を立ててそこを殴ってみた。

簡単に石には貫通する。「これならいける！」俺は調子にのって厚いコンクリートの壁にもやった。

貫通までとはいかないが、8割は穴が開いた。

「さてと・・・次は長距離技を考えるか・・・」俺は考えた・・・そして・・・

あきらめた！！

「畜生！やってられるか！！！」

俺は廃工場へと向かった。

「誰かいないかな・・・お！剛だ！」

俺は声をかけようとしたが、技の練習をした。

ウォーター・クレイジードラゴン

「水暴龍！！！」

剛の背中から巨大な龍が現れ、周りの鉄鋼を破壊する。しかし、持続時間はみじかめだった。

「剛・・・あんな強い技を練習してたのか・・・」
次に俺は山へ向かった。

そこには姫がいた。

エレクトリック・ウイナーナス
「雷女神!!!」

姫から剣を持った巨大な女神が現れ、山を叩き割った。しかし、姫は技を使い終わると倒れた。

「あいつもあんなに・・・俺はなにやってんだ!!!」俺は自分に絶望した。

そして俺は再び河川敷に戻った。

「スピードをあげなくても確実に当てる方法・・・考える!・・・考える!」俺は自分に言い聞かせた。

そして・・・ひらめいた!

「炎に酸素をたくさん含ませて、炎の色を消せばいい!」俺は深く呼吸をし、手に炎を弾をつくる。

「もつと酸素を!」炎は青くなった。

「足りない!もつと!もつと!もつと!もつと!」俺は呼吸を早めた。

しだいに意識は薄れていく。しかし、みんなはもつとがんばっているんだ。

「俺だつてできるんだ!!!」炎は完全に消えた。

いや、炎は見えなくなったのだ!

「いける!影炎弾!!!」俺は遠くの建物めがけて撃った。全く見えない・・・

しかし、ドオオオンという衝撃と共に建物は吹っ飛んだ。

そう、新技は完成したのだ!

「やばい!逃げなきゃ!」俺は喜びながら逃げた。

それから一週間、みんなは技を磨き上げた。そして、能力決

闘会がやってきた。

NO.11「一回戦」

「みんなよく聞けー！今日は能力決闘会当日だ！気合をいれていけよ！」鬼瓦先生は言った。

「まずは一回戦だ。今回の対戦相手は紅葉中だ！紅葉中の奴らは毎年長距離型攻撃を得意としてくる！

接近戦に持ち込んで敵チームを倒せ！

ここ1年C組は核破壊を最優先とし、敵はF組などの下級クラスにまかせるのだ！

それでは紅葉中へ突撃！！」と先生が叫ぶと、一斉にクラスからみんながあふれでていく。

「よし、俺らもいくぞ！」俺らのチームは紅葉中の校門ではないところから奇襲をかけることにした。

「着いたな・・・全員位置についたか？」俺は無線で聞いた。え？無線はどうして持つてるって？

そう、この無線はお金持ちの黒澤が人数分買ってくれたのだ！ありがとう黒澤！

「じゃあ俺が理科室のガラスに穴を開ける！そこでお前らが侵入しろ！」俺は言った。

「まずはちよつと気をそらす必要があるな・・・」俺はそう言い手を構えた。

「炎砲弾！」弾は3階のガラスを割る。

「パライイン！という音とともに、「おい、みんなこっちにこい！敵がきたぞ！」という声がした。

「馬鹿だな・・・そっちには誰もいねーって！」俺はガラスに指を当てた。

「フレイム・レーザー炎光線！」指から熱線がでる。

ガラスは割れることもなくキレイに丸の形にくりぬかれた。

「よし、いまだ！みんな入れ！」俺は先に理科室に入りみんなに指示すると、

「なんか理科準備室の窓開いていたから入ってきたわよ」と姫が言った。

「……え」俺はかなりの精神的ダメージを受けた。

「さてと、核を探すか」剛はそう言った。

「じゃあ下田君、核の場所調べられる？」旭山さんが言うと、

「ちよつと待つてる、今やつてる」と冷静に答えた。

「核は……屋上にある。屋上はけっこう守備を固めているな……」

「下田は言った。」

「なら屋上への突破口をつくるのは私に任せて！」と旭山さんは言った。どうやら新技を使うらしい。

俺らは屋上へと向かった。しかし、そんなに都合よく通してはくれない。

「この学園のAクラスだ。ここでお前らを消す！」と3人のやつらが言ってきた。

「よし、ここは俺に任せるんだ！」剛は言った。

「お前1人でこのAクラス全員はムリだ！俺も残る！」俺は言った。

「それじゃあ戦力がなくなっちゃうだろ！」剛は怒鳴った。

「ならここは僕が残ります。」黒澤が言った。

「ウチも！二人の回復は任せて！」高森さんは言った。

「……チツ！わかったよ！絶対追いつけよ！」と俺は言って上へと向かった。

「やっと戦える時がきたな。」剛はニヤリと笑いそう言った。

「Aクラス3人相手に雑魚が2人はちよつとかわいそうだな。ハハハ」Aクラスの奴らは笑った。

「ウォーター・ストリーム」水流弾！」剛の撃った水の弾は、Aクラスの1人を吹き飛ばした。

「・・・これで平等だろ？」剛はニヤリと笑いながら言った。

「ふざけてんじゃねえ！」他の2人が襲い掛かってきた。

「おっと、君の相手は僕です！トリックキールム隔離空間！！」そう黒澤が言ったと同時に、

黒澤とAクラスの1人が黒い渦の中に吸い込まれていった。

「じゃあ名前を聞こうか」剛は言った。

「俺の名前は長谷川だ！」Aクラスの1人はそう言った。

「んじゃ早速はじめようか・・・」

「望むところだ！お前は最も苦手なタイプと当たったことに後悔するんだな！」と長谷川は言うつと、

エレクトリック・ホワイトタイガー「雷白虎！！」と言い、雷の虎を召喚させた。

「くふふふふ、相性最悪か・・・そういえばアイツ紅蓮も相性最悪で俺に勝ったのか・・・

いいぜ！これくらいハンデだ！ウォーター・クレイジードラゴン水暴龍！！」

剛も龍を召喚させた。

「高森、お前はもうあいつらを追え！ここは俺一人で十分だ！」

「でも・・・」

「あ、忘れてた、お前には重要な任務がある。

お前はこれを持って旭山と合流して別ルートから奇襲をしろ！」

「・・・わかったで！絶対負けたらあかんぞ！」と高森は言って紅蓮たちのほうへ走っていった。

「さてと・・・はじめるか」

水と雷、龍と虎、剛と長谷川

一体勝者はどっちになるのか！？

NO.12「水暴龍の涙」

「粉々にしてしまえ！」体に雷をまとった虎が走ってきた。

「いけ！水暴龍！」龍は唸り声を上げながら突進してきた虎めがけて水をはいた。

「そんなものきかない！雷咆哮！」サンダー・ブラスト 虎は咆哮をした。

「ぐう！これでは鼓膜が・・・いけ！水尾鎌！」ウォーター・テールシッケル

龍の尻尾が鎌のようになり、鋭く虎の前足に突き刺さった。

「グオオオオ！」虎がわめくと同時に、放電した。その電気が尻尾を通して龍に流れる。

「ギユウウウン！」龍はひるんだ。その時に、

「いまだ！雷連撃！」エレクトリック・ラッシュ 虎の猛攻に龍は手もだせない。

「耐える！水暴龍！」剛は言った。なにかいい策はないか・・・

剛は考えた・・・しかし、勝ち目のある技のこの水暴龍しかない・・・

「ギユウウウン！」龍はもう瀕死の状態だ・・・「未完成だが・・・

最後にやるしかない！」

剛はそう言つと、「いくぞ！水暴龍の涙！」と言つた。クレイジー・エンド

龍は一粒の涙を流し、塵となった。

「ふふふ、ざまあねーな！やっちまえ雷白虎！」虎は剛に向かって走ってきた。

剛が深く呼吸をすると、手にさっきの涙が集められていく。

そして、水の弾ができた。

「これで終わりだ！！水暴龍の矢！！」ウォータークレイジー・アロー

その水の弾の形が変化していき一本の矢になった。そして、剛は矢を放った。

その矢は一瞬にして虎の腹を貫通し、そのまま長谷川へと突き刺さつていった。

「こんなとこで・・・！電磁分解！！」プラズマ・デリート

地面が溶けていき、黒澤は沈んでいく。しかし、ニヤリと笑いながら「残念ながらこの部屋の主は僕オナーですよ。こんなもの！」一瞬で地面は元通りに戻った。

「なに！？しかし、これはどうでござるか！炎フレイム・クロスノ十字架！」

永山が地面を斬ると、地面に十字架の割れ目ができ、そこから火柱が立つ。

「ぐはあ！」黒澤は炎に包まれた。

どうやらもう1人の僕の出番ですね

「やーい！お前のランドセルゲット！返してほしかったらこっちまでこいよバカ！」

「返してよー！」

黒澤は小学校の時に、とても平凡な子でみんなにいじめられていたのだ。

しかし、あることをきっかけにいじめは無くなる。

黒澤は図書館へ行った。

「やっぱり、ここはあんな奴らがいなくて落ち着けるよ・・・」すると、そこに自分の同じくらいの小学生が入ってきた。黒澤は思い切って話かけてみた。

「君、名前なんていうの？」

「僕は霧島 遼」その少年は言った。それから色々話をしていくうちに2人は毎日遊ぶようにまで仲良くなった。

ある時、そのことがいじめっ子達にばれた。

「お前、友達できたんだってな！」

「どうせお前の友達なんていじめられっこなんだよな！ハハハハ」いじめっ子達は言った。

「違う！遼はそんなんじゃない！」

「じゃあ俺達が確かめてやるよ！」いじめっ子達は言った。その時、「どうかしたの？」と遼が現れた。

「遼！来ちゃダメだ！！」と黒澤は言った。しかし、遅かった。

「お前が霧島って言うのか・・・俺と勝負だ！」いじめっ子は遼を吹き飛ばした。

遼は道路へ吹っ飛ばされた。その時、トラックが遼の所をとり、遼はトラックに轢かれた。

「遼！しっかりして！」黒澤は涙を流しながら叫びながら近づいた。

「黒澤・・・お願いがあるんだけど・・・」

「何？なんでも聞くよ！」

「俺の右目は特殊な目で、きっとお前が持ってたほうが役に立つだろう・・・」

だから・・・俺の右目を取って、お前に持っててもらいたい・・・」

「そんなことできないよ！」

「いいから早くしてくれ！」遼は怒鳴った。

「・・・わかった。」黒澤は泣きながら遼の目を取った。そして遼は死んでしまった。

「死んじゃった・・・でもお前が右目を取ったからお前の罪だよな
ー！

悪人は・・・死刑だ！」いじめっ子は殴りかかってきた。

「遼は俺と共に生きる！」

黒澤は自分の右目を潰し、代わりに遼の目を入れた。

その時、黒澤から紫の霧がでて、気づいた時には全員吹き飛んでいた。

「・・・これがお前の目の力なんだな・・・」

「私も本気を出しましょうか！イマジン・ワールド幻想ノ世界！」

黒澤の右目が紫の光を放つ。と同時に火柱は消滅した！

「この世界を発動した瞬間に僕の絶対的勝利が確定しますよ。なぜなら……」

黒澤は手を上に突き出し、指をパチンとならすと、永山の体に切れ目ができ、血が大量にでた。

「私は触れなくても攻撃ができます。この空間には目には見えないほどの霧ができており、

この霧が一瞬にして移動することでああなたの体に攻撃を与えられるのです。」

「ぐ……無念……」永山は倒れた。

「ふう……久々に能力を使いましたね。さてと、疲れましたけど……追いかけますか」

黒澤は走りだした。

「その頃紅蓮たちは」

「どうやらこの上に核あるようだな……」

「とつとと破壊しちゃいませよ！」姫が言った。その時、

「ちよつと待った！」と、2人の声が聞こえた。

「誰だ！」俺は聞いた。

「俺達は、この学校の最強コンビ！悪いがここでお前らを倒させてもらう！」

「どーする？」俺は姫に聞いた。

「そんなもん言うまでもないわ……」姫と俺はニヤリと笑いながら言った。

「倒す！！」俺と姫は声を合わせて言った。

「はたしてお前らはどこまで俺達に通用するかな？……クフフフ」

「旭山さん！」その時、高森はやってきた。

「早くきて！私たちにはもっと重大な任務があるの！」

「旭山！行つて来い！」俺はそう言った。

「……わかつたわ！ここは任せるから私たちにこっちは任せて！」
と言い、二人は走っていった。

「じゃあはじめましょうか」俺はニヤリと笑いながら右手を構えた。

NO.13「幻想ノ世界」(後書き)

久しぶりの更新です。

感想・アドバイス・評価などお待ちしているので
じゃんじゃんしてください！

NO・14「魂の共鳴！」

「これでもくらえ！影炎弾！」俺は見えない炎を二人に飛ばした。
「ぐはあ！一体どこから！？・・・」二人は全く気づいてないよ
うだ。

「こんなに強い技とは思ってなかったぜ・・・」俺は自分の能力に
驚いた。

「次は私の番よ！雷双刃！」二つの雷の刃が二人を切り裂く。

「ぐ・・・こんなに強いやつとは思ってなかったぜ・・・なら本気
でいかないとな」二人はニヤリと笑いながらそう言った。

「じゃあ一応自己紹介としようか。俺は浅倉！まあ聞いたとして
もお前らにはここで死んでもらうんだけどな！！くらえ！爆音砲！」
浅倉は大きく口を開けた。

すると、口からなにかがわからないが、もの凄い衝撃が体に当たっ
た。

「ぐはあ！」俺は吹き飛んだ。

「あいつの能力は音よ！見えないから気をつけて！」

「お前も自分の心配したらどうだ？」もう一人は姫の後ろに立っ
ていた。

「危ない！」俺は叫んだ。

「遅い！真空斬！！」そう言ったが何も起こらなかった。

しかし、姫は「痛っ！？」と言って肩を抑えた。そして姫は苦痛に
顔を歪めながら、

「こいつの能力は・・・真空状態をつくりだすことよ・・・」と言
った。

「あーあー名前を言うの忘れてたな。俺の名前は深山だ。・・・っ
てもう聞こえてないかなあ？」

アハハハハ」二人は笑った。

「ふざけるなよ・・・お前ら2対1で女の子に手をだすなんて・・・

絶対に許さない！」俺は叫んだ。

「ああ〜ん？女だろうと子供だろうと俺の邪魔なものは全て殺す！それだけだ！」浅倉は言った。

「……お前の根性叩きなおしてやる！」俺はそう言って右手を構えた。

「おっと、そうはさせないぜ！破壊騒音！！」ブレイクノイズ浅倉が言つと、俺の右腕が動かなくなった。「なんだ！？」

「今のはなあ〜この音を聞かせるだけで脳に刺激を与え、一時的に能力を使えなくし、体のどこかの部分を動かせなくするんだよ〜！」と浅倉は笑いながら言った。

「じゃあ俺らの必殺技いきますかあ〜」深山は言った。そして、二人で拳を俺のほうへ向けて、

「真空騒音連射銃！！」バキユームノイズ・マシンガン

音速になつた小さい真空波がマシンガンのように飛んできて俺に突き刺さる。

「ぎゃあああああ！」肩と太ももを真空波は貫通した。

「紅蓮！」姫は叫んだ。

「畜生……なんで俺が……俺が……こんなところで負けなきゃなんねえんだよ！！！」

その叫びと同時に俺の体と姫の体が光りだした。

「これは！？」俺は驚きながら呟くと、

「これは……魂の共鳴！？」シンクロハートこれは能力者同士が魂を一つにした時に発生する今だ不明な現象よ！この現象が発生してる時に能力の威力は二人の力の合計になる。

つまり強力な技が使えるのよ！」姫は喜びながら言った。

「じゃあ俺なも仕返しをしてやるか……」俺は姫の手を握り、呼吸を合わせ始めた。

「もつとシンク口率を……」どんどん光は大きくなっていく。

「今だ！獄炎電磁砲！」ヘルフレイム・レルガン俺達の腕から巨大な弾が形成された。

その弾は中心の炎を覆うように電気がとりまき、周りの金属を含む

ものが集まっっていく。

そして、中の炎で溶かされ、炎、雷、鉄の塊へと変わっていった。

「そんなバカな！？俺達を超えるコラボなんて！？・・・」深山はかなり焦っていた。

「これでもくろえ！」その弾は勢いよく飛んで行って二人に当たって、そのまま学校の壁を貫通していった。

「ぎゃあああああああ！！」二人は山まで吹き飛んでいった。

「やっと終わったのね・・・」姫はそう言って気絶した。

「いや、まだだ・・・核を破壊しないと・・・」俺は気絶しそうだったがなんとか耐えた。

その時、「お待たせしました。」と言う声と共に黒澤がやってきた。

「よしじゃあ行くか」俺は姫を背負いながら扉を開けた。屋上までの階段はなかなか長い。

「くそっ、この階段を姫という重い物体を持ってあがるのはきびしいなあああああ!!」

「……どうやら左肩が完全に脱臼しているようだ。(姫のせいです)そろそろ屋上ですね。急ぎましょう。」黒澤は言った。

「フッフ、甘いぜ姫！俺はお前に脱臼を200回近くさせているので自分で直せるのだ!!!」

俺はどや顔をしながら脱臼を直した。

「到着ー」俺は姫を地面に降ろした後に前を見ると、そこには大きな核があった。

「これが核か……とつとと破壊しちゃおうぜ」俺は右手を構えながら言った。

「ちよつと待って!!これは罨だ!!」黒澤は言った。

「バレたか……でももう遅いぜ！」と言う声と共に周りを見たときにはもう周囲を40人くらいに囲まれていた。

「残念ながら俺達の学校は守備を固めていたのさ！これでおしまいな！」と一人が言った。

「どーします？」黒澤は言った。

「どーするって全員倒すしかないだろ！」俺は右手を構えた。

「そーですよね……」黒澤の右目が紫に光りだす。

その時無線で、「目をつぶって！」という声と共に強烈な光が見えた。

一瞬で俺達は目をつぶったが、不意をつかれた敵は全員地面に倒れこんだ。

「これが私の力よ！」旭山が後ろから現れた。

「紅蓮！これ使って！」高森は筒を渡してきた。

「その頃校長室では・・・」

校長「ほう、今回はこいつらが・・・」

鬼瓦「はい。こいつらはC組だけどB組並の戦闘能力を持っています。」

校長「こいつは面白くなってきたな・・・こいつらならアレも・・・」

鬼瓦「校長！その件はあまり言わない約束でしょう・・・」

校長「ああ、悪かったな・・・これは楽しみなやつらだな・・・」

NO・15「罇」(後書き)

もうすぐ400アクセスです!!

みなさんありがとうございました!

これからも頑張っていくのでアドバイス・感想・評価等を是非お願いします!

NO.16「ボウリング大会！」

俺達のグループは今回の戦争の報酬で手に入れた金で、今打ち上げパーティーをやる場所なのだ。

「よっしゃー！2万もあるけどどこ行くー？」高森は片手に持っている諭吉を2つ見せながら嬉しそうに言った。

「んーとまあ、ボウリングでも行くか！」

「賛成！！」

そして、俺達はボウリングに行くことにした。

「じゃあ一番ビリだったやつが負けた人が一番の人の言う事なんでも聞くって言うのはどう？」

姫は言った。

「それは面白そうですね。」黒澤はずつと読んでいた本を閉じて言った。

みんなはどんどん投げいき、俺の番になった。

「じゃあまずは俺からだな！おりゃあああ！」俺はボールを投げた。

・・・1ピン。「ちくしょおおおおおお！」俺は本気で投げた。

・・・2ピン。「もうやだorz」俺は自分の弱さをはじめて知った。

「私の番ね！」姫はボールを構え言った。

「お前・・・6ポンドつてwwww」俺は爆笑した。

「うるさいわね！！」姫はボールを投げた。

ボールはキレイなカーブをしながら、見事に全てのピンを倒した。

「なに！？俺はこんな6ポンドごときに負けたのか！」

「うるさいわね！まああなたのビりは確定ね！」姫は嬉しそうに言った。

それから俺達はどんどん投げっていく。そして最後の10レーンになった。

今のスコアは

剛227 黒澤81 旭山45 高森182 俺22 姫231
だ。

「……さようなら、ボウリング。もう絶対こないからな!!!
とうとう俺の番が来た。」

「俺が集中した時の恐ろしさを教えてやる!」

旭山さんは48で終わったからまだ勝てる確率はある。

「いくぜええええええ!!」俺の投げたボールは7ピン倒した。

「ここでスぺアにつながらないと……」俺は深呼吸をして、投げた。

なんと……スぺアだ!!!

「よっしゃあああああああああああ!!!」

「この1球に俺の全てをかける!」俺は神が与えてくれた最後のチャンスが無駄にしないように決意した。

「いけええええええええええええええええ!!」俺の投げたボールは勢いよく飛び出した。

そして……2ピン

「え?」その時俺は目の前が真っ暗になった。

そして……

目が覚めた頃には剛の背中に乗せられてた。

「おう、起きたか。もちろんお前がビリだったぞ。そして一位は姫だったからな。」と剛は言った。

「じゃあなんでも言う事聞いて頂戴よね……私と……デートに行きましょう」姫は頬を赤くしながら言った。

「いやだああああころされるううう!!」「うるせえから行くうううってんだよ!!!」

バキバキ!!!という音と共に俺の腰は砕けた。

「じゃあ明日ね」姫達はそう言って。

「じゃあ俺達も帰るぞ」

「そうだな。やれやれ・・・明日がっらいな」俺はそう言いながら剛を家へと歩いていった。

明日、悪夢を見ることになるとは知らずに・・・

NO.17「これは本当にデートと呼べるものなのでしょうか……」

7月27日。晴天。とても気持ちのいい朝だ。

そう、この後に地獄デートが待っていないとしたら……

俺は姫の家へと向かった。

「はあ……こんな日は家でのおんびりしてたいの……」俺が嘆きながら歩いていると、

「遅いわよ〜！」と姫は言ってこっちへ向かってきた。

それはいつもの姫とは違い、とても女の子らしい格好ででてきた。

「うおおお！コレは萌えるぜ！！！」と俺は小声で言いつつも、冷静に装いながら

「んで、どこ行く？」と聞いた。すると姫は、

「じゃあね〜……遊園地！もちろんあんたのおごりだね！」と笑いながら言った。

さよなら……俺の諭吉……来月までお別れだな……

そんなこんなで俺達は遊園地へと向かった。

「ここか……」俺はそう言いながら入場券を2つ注文した。

「合計21300円になります〜」

なに！？諭吉を二枚も召喚しないとイケないだろ！？くっ……貴様！！ぼったくりか！！

俺は後ろを見ると、姫がもの凄い威圧感でこちらを見てくる。

「……」俺はなにも言わずに諭吉と小銭を召喚した。

そして俺達は遊園地へと入場した。

「最初はどれに乗る？」

「う〜ん……コーヒーカップかな？」姫は地図を見ながらそう言った。

「じゃあ行くか」と言いながらコーヒーカップに乗ろうとすると、

剛と中島さんが降りてきた。

「剛、お前もきてたのか」

「ああ、正式には連れてこさせさせただけだな。おかげで諭吉が二人も死亡した・・・」

「やっぱりお前もだったんだな・・・」俺と剛は涙を流しながら言った。

「・・・剛、楽しかった」

「玲、お前のせいで俺はこんなに吐きそうに・・・」剛の顔は青ざめていた。

そう、中島さんは能力でとてつもなく早くコーヒーカップをまわしたらしい。

「じゃあ二人とも頑張ってたね！」姫はそう言い残して、俺と一緒にコーヒーカップへと言った。

「あー楽しかった！」

「楽しかったな！次はどこ行く？」

「うーん・・・お化け屋敷!!」

しまった！俺は・・・お化けが大嫌いなんだあああああああああ！！

「わ、わ、わ、わかった」俺は心の叫びを閉じ込めて言った。

そして、お化け屋敷へと向かった。

井戸から女の人が出てくる。

「きゃあ！」姫は俺にだきつこうとしてきたが、

俺はそんなことをされることもなく猛ダッシュで駆け抜けた。

そして出口へでた。

「もう!!」姫はムスツとしてたが、クレープをおごると機嫌を取り直した。単純な奴だ。

「さてと・・・もう時間だし最後にどこ行く？」

「やっぱり観覧車かな？」

「よし行くぞ」俺達は観覧車へと向かった。

「ねえ……私のことどう思ってる？」姫は上目遣いで聞いてきた。

くそ……俺のときめき度が!!!

「うん……嫌いじゃない」

「なら……好き？」

「うん……微妙」その瞬間俺の首の骨が折れた。

「もう一回言つて？」

「うそですうそですうそです大好きですから許してください」

「なら私と……」と姫が言いかけた瞬間に、観覧車が止まった。

「一体何が!？」

その時園内放送がかかった。

「えーこの遊園地は私たちがハイジャックさせていただきました
あと5分後に観覧車を爆破するので要注意を」

「え〜!!!!!!?????」

NO.18「5min 爆発」

「おい！どう言うことだ！5分後に爆発って！！」俺はとてつもなく焦っていた。

さすがに、イタズラにしては派手すぎる・・・これが本当なら間違えなく俺達は吹き飛ぶだろう。

「どうすんのよ！」姫は涙目になりながら言った。

「そうだな・・・」俺は冷静に考えた。

「なにか方法はないか・・・ここは観覧車のでっぺんで・・・周りにもたくさんの人が閉じ込められている。あいにく周りは木などではなく、飛び降りて助かるとは思えない。

「・・・ん、・・・待てよ？・・・なにか見落としてないか・・・

俺は公共施設の設備のきまりを思い出した。そして・・・

「わかったぞ！！」と言い、観覧車のドアを開くと同時に、「フレイム・キヤノン炎砲弾！」

と、火の弾を周りに撃ち始めた。

「ちよつとなに無駄なことしてるのよ！」

「まあまあ見てなつて・・・」遊園地全体が燃えていく。

「そろそろだな」俺はニヤリと笑いながらそう言つと、地面からたくさんのスプリンクラーや放水機がでてきて一斉に鎮火を始めた。

「よく考えてみるよ。こう言う遊園地は法律で全ての設備に水をかけられるようにたくさんスプリンクラーや放水機がつけられているんだぜ。そして、やつらがさつき爆発つて言ったけど、爆弾を観覧車の中心とかにとりつけてる可能性が高いだろ。なら、この放水で爆弾に水がかかれば爆発することはないだろ。さてと・・・あとは炎が爆弾に着火しないと、爆弾に水がかかることを祈るしかないな・・・」

「もし、ダメだったら・・・」

「そうさ、俺達は木っ端微塵に吹き飛ぶだろう。」

「そんな！」

「安心しとけ、もし吹っ飛んだとしても死ぬくらいだから」

「それが嫌なんだつつうの！！！！」俺はヘッドロックをかけられた。

「痛い痛い痛い痛いすいませんでした」

そうしている内に5分がたった。

ボス……とう音しか俺達には聞こえなかった。そう！作戦は成功したのだ！！

「じゃあ後は私に任せて！」そう姫が言うと、姫は観覧車に電気を流し始めた。

「これで多分動くはず……。」という声と共に、

ゴゴゴゴゴゴと観覧車が動き始めた。……最初からこうしとけばよかったのに。

「さてと……あとは奴らに制裁をしなくては」

「そうね……せつかくのデートを邪魔してくれたものね」

「いや……それはありがたかったけどね」

「お前から制裁してやろうか！！」姫は俺に四の字固めをしてきた。「痛い痛い痛い痛い許してください楽しいにしてみましたからはなしてくださいさあああい！」

「よし！じゃあ行きましょう」姫は苦痛で歩けない俺を引きずって本部へと向かった。

「ここね」姫は言った。

「さてと、奴らはいるか」俺は本部へと入った。

しかし誰もそこにはいなかった。

「ツチ……遅かったか……ん？なんか落ちてある」俺はそれを拾い上げて姫に見せた。

「生徒……手帳？……これって……緑ヶ丘中のじゃん！」

「ってことは……こいつらが犯人の可能性が高いんだな」俺は手

を握り締めて言った。

「富士谷 葵か・・・絶対に見つけ出してやる!」俺は壁を叩いて言った。

NO.19 「犯人捜索」

次の日・・・

俺達は学校にいた。授業が終わって帰る時に姫が、

「ねえ。昨日の富士谷 葵って言う人探してみない？」と言った。

「そうだな。そいつに会ってけりをつけたいしな」俺はそう言うその後ろから剛がやってきて、

「昨日の遊園地の事件か・・・。実は俺も観覧車に乗ってたんだ。

その犯人にちよつと会ってみたいな」と言った。すると今度は中島さんが教室に入ってきて、

「・・・剛が行くなら私の行く」と言った。・・・なんて耳がいのだろうか。

そんなことはさておき、俺達は今日の放課後、富士谷と言う人物を探しに行くことにした。

そして俺達は集まり、緑ヶ丘中に行ってみた。

「みんな、生徒手帳によると、富士谷は男で、能力は風使いのようだ。」

そして写真がはいっていたんだが、それをコピーしてきた。これで情報収集をしてくれ。」

と言いながらみんなにコピーした写真を渡した。

「なかなかのイケメンだね！」姫は言った。

「さて・・・情報があつたらメールで送って。もし何も無かつたら1時間後にここに集合しよう。」

じゃあみんな分かれて情報収集開始！」と俺が言った後、みんなは散らばっていった。

「じゃあまずは学校内を回ってみようかな」

俺は緑ヶ丘中の中の生徒全員に声をかけてみた。

しかし、全員「知ってるけど教えられない」とか、「帰れ」とか言うだけで何も教えてくれない。

なぜだろうか・・・俺はそう思いながら、教師に聞いてみると、「すいませんが、次に当たる中学校の生徒に情報提供することはできません。」と言われた。

なるほど、次の対戦中学校はここか・・・これは潰しがいがあるな、と思いながら俺は中学校を後にした。

「しかし、なにも情報がないな・・・」と俺は思いながら歩いていくと、

ブルルルルルとケータイがゆれた。姫からの電話のようだ。

「はい？」

「もしもし！ハアハア・・・早くきて！ブロロロロロロ・・・ハアア・・・」

あいつがいたの！ここは・・・水の音がする！・・・きゃあ！」と言い電話が切れた。

「姫！！」俺は電話をかけ直したが通じない。

「畜生！！」俺は走り出した。

水・・・水・・・水って行ってもどこだよ！俺は焦っていたが、一旦落ち着いて考えてみた。

電話を思い出せ・・・ブロロロロロって何の音だ？あの音は・・・船？・・・

そうか！船ってことは・・・近くに港があるはずだ！！

つまり・・・港の近い海だ！

俺は地図を見た。この地区に港があるのは・・・足利区しかない。

「そこだ！」俺は足利区へと走り出した。

「待っててくれ・・・姫！！」

NO.20「迅速の風」

「少し戻った頃姫は……」

「いやあーどこにいるのかしら」私は手当たり次第写真を見せて回っていた。

その時、4人くらいのグループが、

「俺達そいつのこと知ってるぜ」と言ってきた。

「本当!? 会わせてもらえないかしら」

「ああ、いいぜ。ついてこい」

私はそいつらについて行っただ。この後、大変なことになることも知らずに……

「ねえ……まだなの?」私は港まで連れてこられた。

「ああ、もうそろそろだ……」そいつらはニヤニヤしながら言った。

本当に大丈夫なのかしら……一応私は紅蓮に連絡できるようにケータイをポケットに入れておいた。

「ここだ。」私が連れてこられたのは、港の近くの倉庫だ。

「富士谷さん! 例のやつらの一人連れてきました!」

「ああ、そうか……」と言う声と共に、誰かが倉庫の奥からでてきた。

「誰?」

「俺が富士谷だぜ(キリッ)」富士谷は決めポーズをしながら言った。

「……ふーん」

「なんだよその反応!! めっちゃさびしいじゃないか!!」

「……そんなことより俺の事を探してたようだな。」富士谷はニヤリと笑いながら言った。

「あんだなんでしょ？観覧車吹っ飛ばそうとしたの」

「そうだけど・・・何？」

「ぶざけてんじゃないわよ！！悪いけどここでくたばってもらわ
ない！私は右手から電気をバチバチさせた。

「ふくん・・・そいつは無理だな！」富士谷がそう言つと100
人くらいの奴らがでてきた。

「こいつらはなあ・・・体力もてあましてんだよ。少しくらい遊ん
でもらおうか！」

「おお！！！」という叫び声と共に全員がかかってきた。

これはまずいわ・・・と思いつつ私は急いでケータイを取り出し、
紅蓮に電話をした。

しかし途中で奴らの攻撃を食らった。

「きゃあ！」ケータイを落としてしまった。もう取りにはいけなさ
そうだ。

「しょうがないわね・・・やるしかないのね！雷双刃！！！」ライトニング・ツインエッジ

二つの雷の刀が形成されていき、私が振り回すと敵はどんどん吹き
飛ばされていく。

そして大体30人近くは倒した。

しかし、後ろからどんどん攻撃がくる。

「きゃあ・・・これじゃあちがあかないじゃない！！」私は言
つた時、

一つの炎の弾が倉庫の壁を突き抜けてきた。

「紅蓮！遅いわ！早くこいつらやってちょうだい！！」私はそう言
い気絶してしまった。

「やれやれ・・・面倒なお姫様なこと」紅蓮はそう言って、手の
ひらを合わせた。

「この人数ならやってみるしかないよね・・・俺の新技を！！」

「ほう、これは興味深いね」富士谷は言った。

「お前が富士谷か・・・後悔するんだな！俺ら光中と戦争すること
を！紅蓮刃！！」ヘルフレーム・エッジ 紅蓮はそう言つて合わせた手のひらをどんどん伸

ばしていく。

すると、手のひらの間にマグマのようなドロドロの液体がでてきて、急速に固まりながら、

とても長い長い一本の太刀が出来上がっていく。

「おらああああ！」紅蓮は刀を振り回すと、周りにいた富士谷以外の奴らが全員なぎ倒されていった。

「これはすごいね・・・富士谷は拍手をしながら言った。

「次はお前だ！」

「まあ戦うのは戦争にとつとくよ・・・君もその間に体の傷治しておいてね！クイック・エア迅速の風！」

すると、富士谷は俺の背後に移動していて、俺の体にはたくさんの傷ができていた。

俺は悲鳴をあげることできずに倒れてしまった。

一体、アイツのさっきの技はなんだっただろうか・・・

NO.21 「激戦！vs緑ヶ丘中！！」

俺達は富士谷との戦いを終えた後、自主練を繰り返し、戦争へとそなえた。

そして、因縁の緑ヶ丘中との戦いの当日となった。

「みんな、今回の奴らは強いからな！なんてったって人数がウチの学校の倍以上いるからな。

気をつけてかかれ！！今回は危ないのでAクラス・Bクラスの半分を防御に回し、それ以外のクラスは全員で攻撃にすることにした！
！今回は核の破壊が最優先だ！

今回もよろしくたのむぞ！！・・・それでは、出陣！！」という鬼瓦先生の声と共に俺達は緑ヶ丘中へと向かった。

しかし、もうすでにあちらの軍が校門前をふさいでいた。

「おい、これじゃあ校庭からでられないぞ！」

「俺に任せるんだ！」剛はそう言い、地面に手を当てた。

「大津波！！」地面から大きな水の壁ができあがり、

その壁が津波のように校門前の奴らに襲い掛かる。

生徒は流されていった。しかしまだ後ろにいる。

「次は俺だ！紅蓮刃！！」^{ヘルフレイム・エッジ}手のひらを合わせ、ゆっくりと伸ばしていく。

手の平から長い刀が形成され、振り回すと奴らが吹っ飛んだ。

「お前、もの凄い技つくったんだな。」

「お前もだろ、剛」俺達はハイタッチをした。

「さてと、ここから向かいますか」俺が言うと、

「この先に3つの道がある。」

1つ目は敵軍がうじゃうじゃいる。2つ目は罠がたくさん仕掛けられている。

3つ目は・・・とくになにもないようだが遠回りだ。どうする？」

と下田は言った。

「1つ目の道にしよう。敵もぶつつぶせば一石二鳥だろ。」俺がそう言つと、

「やめて！3つ目にしましょう！ここで体力を消費するのはもったいないわ！」と姫が言った。

どうやらみんなも姫と同意見のようだ。

「・・・わかった。ここは安全に行こう」そうして、俺らは安全な道を通ることにした。

「もうそろそろですね。」黒澤は言つ、

「待て！さっきの1つ目のルートのやつらがこっちへきてる！」下田は言った。

「どうやら私の出番のようですね」旭山はそう言つとみんなに目をつぶるように言つて、

「シャイン・イメージン光錯覚！」と胸の辺りで手を の形にして言った。

すると、そこから一筋の光がでて、敵の軍団のところまで一瞬にして閃光した。

敵は、俺達と違うほうへ走っていった。

「もう目を開けていいですよ。今ので敵は私たちがあっちにいると思ひ込んでいますので。」

と自信満々な顔をして言った。

「じゃあ侵入しましょうか」俺達は校門へと入った。

そこには大量の生徒達が待ち構えていた。

「本当に人数だけはすごいね」姫は言つ。すると、その軍の中から二人がでてきた。

「ようこそ緑ヶ丘中へ。僕の名前は工藤。」

「俺の名前は鯖島だ！！俺らはこの学園の最強7人と呼ばれているメンバーの内の二人だ！」

悪いがここでお前らを倒させてもらつぜ！まずは手始めにこいつら

と遊んでもらおうか！」

そう言つと、周りの奴らが飛び掛つてきた。

「もう……めんどくさいですね。幻想イマジン・ワールドノ世界！」黒澤の目が光りだし、

襲い掛かつてきた奴らの体を引き裂く。全員が痛み^に悲鳴を上げ、地面へと倒れこんだ。

「ほう、これは面白いですね。富士谷さんの言つとおりの骨のある奴らだ」工藤はニヤリと笑つていった。

「んで、誰が残るんだあ??」

「ここは私に任せて！」旭山さんが言つた。

「ウチもいけるで！」続いて高森さんが言つた。

「高森さんは攻撃技使えないんじゃないの?」姫が聞くと、

「ウチだつて攻撃技くらい習得したわ!」と言つた。

「よし、わかつた!じゃあ俺らは先にいこう!」そう言い、俺、剛、姫、黒澤、下田の五人は校内へと入つていった。

「……おいおい、本当にこいつらでいいのか??」鯖島は笑いながら言つた。

「私達をなめないで!」

「そいつは面白そうだな!」と言い、鯖島は瞬間移動した。

ブスリ……と言つ音と共に高森の腹に鯖島の腕が刺さる。

「うぐう!」

「なんだ……もうノックアウトかあ??」

NO.22 「座標移動」

「もうノックアウトかあ??」鯖島はそう言いながら高森の腹に刺した手を抜く。

「甘いで!超回復!」スーパーヒーリング高森がそう言っ腹に手を当てると、腹の傷がふさがった。

「ほう・・・でもそれじゃあ攻撃はできないよなあ?」また鯖島が瞬間移動して、高森の背後にいた。

そして、高森の周りを高速で一周した。すると地面に丸い印ができあがった。

「こいつでどうだ?座標移動!」ポインタ・ワーフ

すると、地面が消えた。そして、その上の高森が落ちていく。

「さてと、俺らはこっちで戦わせてもらうぜ」鯖島もその穴へと落ちていった。

「高森さん・・・頑張つて!」旭山さんはそう言つと、胸の辺りで手を の形にした。

「痛つ・・・!」高森は暗闇の中でそう言つた。

「ここはどこやねん・・・」そう言つたと同時に上からなにかが降つてきた。

「一体・・・なに?」高森がそう言つた瞬間に、また腹に手が刺さつていた。

「どうだい?痛いだろ?」鯖島は手をぐりぐり動かしてくる。

「ぎゃあああああ!」高森は悲鳴をあげた。

「いいねえ・・・いいねえ・・・最高だねえ!!!!」鯖島はもう片方の手も腹に刺した。

「うぐう!・・・」高森は手もだせない。

「・・・どうやら使つしかないんやな・・・」高森は鯖島の

右手を触った。

「逆回復！」コントラリー・ヒーリングそう言うのと、回復するのではなく、鯖島の手がどんどん消滅していった。

「うぎゃあ！てめえ・・・なにしゃがった！」鯖島は消えた自分の腕を見ながらそう言った。

「簡単な話や！回復というのは本来、体の傷を治すことや！

ならその反対のことをすればいいんや！もともと傷もない腕に逆回復をすることによって、

細胞がどんどん破壊されていき最後には・・・」高森は自分の腹の傷を治しながら言った。

「なるほど・・・クフフフフフ」

「なにが面白いねん！」

「なにがって？・・・こんなにゾクゾクしたことは久しぶりなんだよお！！」鯖島は叫んだ。

そして、また背後に回ってきた。

「同じ手は何度も通用しないわ！」高森がもう片方の腕を掴もうとしたら、もういなくなってた。

「おいおい・・・上だぞ！！」気づいたときには鯖島は上にいた。そして天井を触った。

「座標移動！！」天井（もう土の塊と言ったほうがいいもの）となつて高森の頭へ落ちてくる。ポイント・ワープ

「やばいで・・・分解回復！」高森は落ちてきた天井に触った。デリート・ヒーリングすると、天井はどんどん消滅していき、高森の横に土に変換されて落ちてきた。

「やっぱり、楽しいぜ！！」鯖島はもう一度飛び掛ってきた。コントラリー・ヒーリング

「もうおしまいや！！逆回復！」高森の手は鯖島の足へと当たった。そして、どんどん分解されていく。「俺の・・・負けだな」鯖島

はそのまま地面へと倒れこんだ。

「旭山・・・ウチ・・・勝ったで！」高森は涙を流して言った。

「さてと・・・こいつの傷なおさなあかな・・・完全回復！」グレイトフル・ヒーリング

すると、鯖島の傷がどんどん治っていく。

「どうして……俺なんかを助けてるんだよ……」

「傷ついたやつを助けるためにウチの能力はあるんやで！」

すると、天井が崩れ始めた。さっきの天井破壊の影響であろう。

「ツフ……このままだと俺達どっちも死んでしまうな……」

「くそっ……逆回復するしかなさそうね……」

「その必要はないな……」鯖島は高森の肩を触っていった。

「傷を治してもらったお礼だ……ごめん……せつかく治し

てもらった体を無駄にして……ポイント・ウープ座標移動！」すると、高森は地上

へと飛ばされた。

「……俺って馬鹿だよな……」

ドシャアアアアアアア……と言つと音と共に鯖島は土に埋もれた。

「鯖島……！！鯖島……！！」高森は地上で鯖島を探していた。

「あいつ……なにしてんねん……鯖島……」高森は泣きながら探した。

そして、さっきまで戦ってた場所に戻ると、穴が土で埋もれていた。

「あいつ……」高森は泣きながら土を掘り始めた。しかし、その穴の中のどこにも鯖島はいなかった……

すると、後ろから肩を叩かれ、振り向くと

「死んでるでも思ったか？」と鯖島は笑いながら言った。

「今回は俺の負けだ。お前は核を破壊しにいけ！核は体育館にあるぞ！」

「でもそしたら、あなたの中学校が負けちゃうじゃない！」

「いいんだ……それよりこの能力決闘会にはもつと恐ろしい事実が隠されている。」

俺達の7人はその事実を知ってしまった。だからこんな戦いどうで

もいいんだ!!」

「その事実ってなんなの？」高森は訪ねた。

「それはだな・・・」すると、鯖島のケータイにメールが届いた。

鯖島は読み上げると、「やばい!こんな戦争中止だ!!事態が変わった!」と言い学校の中へと走り出した。

「一体なんなのよ!」高森も鯖島を追いかけて学校の中へと入っていった。

NO.23 「対能力者用兵器（AKUMA）」

「じゃあ最初から話すぞ……」鯖島は走りながら唾をゴクリと飲み込んだ後言った。

「あれは俺達が一回戦をしていた時のことだ。」

俺達は戦闘することもなくのんびり核の護衛をしていたんだがな、俺達のグループの中に悪趣味なやつがいてよ。そいつは『忍者』って呼ばれている程隠密なんだよ。

そしてそいつがほんの好奇心で校長室に隠しカメラをしかけたんだ。そこで、校長が手にしていた資料があつてな。それを見ながら誰かと電話してたんだよ。

その電話の内容が、『殺人兵器』とか『能力者大量殺害』などという内容だったんだよ。

そして、俺達のグループのリーダーの富士谷さんが校長を呼び出している間に『忍者』がその資料をもってきたんだ。

そこに書いていた内容がだな……『対能力者用兵器（AKUMA）について』と書いていたんだ。

そのAKUMAっていうやつはなあ、能力の効果を打ち消すことができるし、

AKUMA自身も能力を使うことができるんだ。しかも、AKUMAはもうすでに大量生産されていて、

今回の能力決闘会で勝ち抜いた学校とAKUMAで戦闘テストを行うんだ。

しかも最悪なことにAKUMAは感情を持たないから、そいつを殺すまで戦い続けるんだよ。

だから俺達はとつとこんな大会やめにしようということ、奴らのグループの経済力を奪ってたんだ。お前も知ってるだろ？あの、遊園地の事件……あれ、俺らでやったんだぜ」

「聞いたことはあるで！」

「じゃあ話を続けるぞ。それでな、俺達の作戦に気づいたやつらはもうAKUMAをこっちへ派遣しようとしているんだ。あと3週間くらいでこの緑ヶ丘中に上陸するらしい・・・だからこんな戦争をやめちまって勢力を温存したいんだよ!」

「なるほどな・・・ほな、ウチらも協力するで!」

「ありがとよ・・・今は早く富士谷さんに伝えないと!」そう鯖島は言い、走るスピードをあげた。

「その頃旭山は・・・」

「いきます!閃光砲!」旭山の手から光の弾が放たれる。

「ぐう!・・・なかなかやりますね!」工藤は弾を手で受け止めた。そして、弾は工藤の手の平の上で消滅した。

「次は僕の番ですよ・・・」そう言うと工藤は大きくジャンプした。

「暗黒十字斬!」工藤は空中で叫ぶと、手を十字に動かした。

すると、旭山の背中に十字の傷がついた。

「うぐう!」旭山はよろめいた。

「どうして!?!・・・触つてもいなかったし、能力が見えなかったのに・・・」

「僕の能力は闇の能力です。僕と貴方はどうやら相性最悪のようですね・・・」

工藤は地面にスタつと足をつけた。

「確かに、光は闇に弱いわ・・・しかし、闇も光に弱いのよ!!」
シャイニング・クロスブレイド
閃光十字斬!」旭山は工藤の技を再現してみた。

「これはすごいですね・・・しかし」工藤はニヤリと笑いながら手で十字斬を受け止めた。

「それはどうかしら?」旭山が放った衝撃は、工藤の手に深い傷をつけた。

「ああ・・・きれちゃいましたね」工藤は手からでた血を舐め

た。

「血……おいしい……。血……。血……。血イイイイイイイイイ！」

「この人……。様子がおかしい!!」それは、先程までの工藤ではなかった。

「血……。オイシイ……。お前……。殺ス!!」工藤の体が真っ黒に染まり、背中からメキメキという音と共に翼が生えてきた。

「殺ス!!!!!!」

NO.24 「悪魔の刻印」

「殺す！！！！」悪魔のような姿の工藤は口を大きく開けた。

ダイクネス・エッグプラント

「闇卵植！！」悪魔の口から黒い霧がでる。

その霧はどんどん集まっていき、黒い塊となった。

「死ネ！」という声と共にその塊が旭山へと寄生した。

「ちよつと！！！！なにこれ！！」旭山は必死にその塊を放そうとしたが、全く離れない。

「ソイツハアクマノタマゴダ！！オマエノ体力をドンドン奪ツテイクゾー！！」悪魔は笑いながら言った。

「くっ……！！」旭山はだんたん衰弱していった。その時、学校2階から高森と鯖島が、

「そいつは人間じゃない！！AKUMAだ！！もう寄生されちゃったのか……

まあいい！！こいつの背中に悪魔の刻印という、心臓のようなものがあるからそいつを潰せ！！」と言った後、再びどこかへ走って行ってしまった。

「詳しいことはわからないけど、とりあえずやるしかないわね……

・旭山はAKUMAの方へと走りだした。

「邪魔ダ！」AKUMAは肥大化した腕で殴りかかってきたが、華麗に避けた。

「まずは目を封じる！シャイン・イマジン光錯覚！」光がAKUMAを包み込んだ。

「グワアアアア！」AKUMAは暴れだした。その隙に背後へと回る。すると、背中に腐敗した肉のようなグロテスクな物が埋め込まれていることを確認した。

「あれが悪魔の刻印ね……喰らいなさい！！シャイニング・クロスブレイド閃光十字斬！！」

光の十字の衝撃は刻印へとまっすぐに突き進んでいった。そして刻印に直撃すると、

「グオオオオオオオ！！」という唸り声を上げてAKUMAは口

から血を吐き出した。

「ヨクモヤツタナ……！！一終焉ノ闇（エターナル・ダークネス！！）」

AKUMAはこちらを向くと、右手を旭山へ向けてきた。するとどんだん手が黒くなっていき、鋭い鎌のようになった。

「キエロ！！」AKUMAは一瞬で旭山の背後にいた。

ブシューウウー！という音と共に旭山の体は切り裂かれていて、旭山は地面に倒れこんだ。

「タノシカッタ」AKUMAはそのまま学校内へと入っていった。

（その頃紅蓮達は……）

「旭山さんへの無線がつかない！！」俺は無線機で何度も旭山さんと呼んだ。

「こうなったら救助が必要ね……」

「なら俺がいく！俺はこの先戦えないからな」下田は言った。

「僕もいきます。下田君だけでは危険すぎます」黒澤は言った。

「……じゃあ任せた！なにかあったら無線で知らせてくれ！」俺は言った。

「わかりました。いきましよう、下田君」そう言い、二人は逆方向へと走り出していった。

「さて……残りは俺らだけだな……」剛は言った。

「まあどうにかなるわよね……」と姫が言った瞬間、手裏剣が飛んできた。

「危ないわね……」姫の手には手裏剣がくつついていた。電磁石の力を利用したものだろう。

「ここまでするだけあって、さすがだな。」忍者は姿を現した。

「本当にこいつら強いんですか？」続いて小学生5年生くらいのぬいぐるみを持った女の子がでてきた。

「紅蓮こいつらはあたし達に任せて！あんたは富士谷に仕返しをし

にいつてきて！」

「でも……」

「お前がリーダーなんだ！お前が行かなくて誰がいく！」剛は怒鳴った。

「わかった！早く追いつけよ！」そう言って俺は上へと走り出した。

「そうはさせないでござる！」忍者は俺に向かって手裏剣を投げた。

「お前の相手は私だっつうの！！」姫はまた手裏剣の軌道を電気ですらした。

「ほう、面白い……」忍者は一瞬で姫の懐へと入ってきた。

「陰陽拳撃！」いんようけんげき忍者の放った一撃の拳が姫の腹にあたり、姫を天井まで吹っ飛ばす。

「きゃあ！！！」姫は天井にぶつかったあと、そのまま地面へと叩きつけられた。

「忍術の恐ろしさを教えてやろう」忍者はニヤリと笑った。

NO.25 「究極忍術」

「忍術の恐ろしさを見せてやろう」そう忍者は言うと、姫の周りをゆっくりを回り始めた。

「本来、忍術というのは能力のような怪奇現象ではなく、自分の肉体を最大限に活用して攻撃する体術だ。しかし、我々の里で編み出された忍術は、能力と忍術をうまく融合して、強靱な一撃や多彩な忍法を使えるようにした『究極忍術』というものだ。例えばこんなことができる。」そう言うと、さっきまで姫の周りを回っていた忍者の姿がだんだんと薄れていき、最後には消えてしまった。

「一体どこにいったの!？」

「ここだ」忍者は姫の後ろにいた。そして、蹴りを入れてこようとした。

「甘いのよ!雷ノ波動!！」
サンダー・ウェーブモーション

姫を中心として姫の体から円状の電気をまとった衝撃波は放射された。

「ぐふ!」忍者の腹に衝撃波は直撃した。しかし、衝撃波は広範囲な攻撃なので、周りにいた女の子や剛にも直撃した。

「ぐはあああああ!」剛は電気に弱いので、相当なダメージを受けてしまった。

「痛い……ですわね」女の子にはあまり効いていないようだ。

「ごめん!……お願いだからどこかへ移動して!！」

「わかった。俺はこの女の子と違う場所へ行く。嬢ちゃん、俺についてこい」

「あらあら、鬼ごっこですか?鬼ごっこは好きですわよ」

「全く、やっぱり子供だな」そう言い、剛と女の子は走り去っていった。

「……さてと、私もコレを外して本気を出しましょうか」姫はそっぴい、手足につけていた金色のリングを外していった。

「これは能力制御装置って言うてね、能力の威力を抑えることができるの」

「なぬ！？今までおぬし、それをつけて私と戦っていたのか！？」

「そうよ。じゃあ一発いくわよ！！エレクトリック・レールガン超電磁砲！！」

姫の手からでた一筋の雷の光線は、忍者へと直撃した。

「ぐはああああ！！」忍者は姫の攻撃に耐え切れず、倒れた。

「これは驚いた。私を転ばせたのは富士谷さん以外には誰もいなかったのに・・・」

これは私も本気でいかないといけないようだな」忍者はそう言うて立ち上がると、今までとは比べ物にならない速さになった。

「全く見えない！！・・・」姫は必死に忍者の残像を追いかけたが、追いつけなかった。

姫が気付いた時には、体にたくさんの切り傷ができていた。

「ったく・・・まどろっこしいわね・・・本当は使いたくなかったけど・・・」

姫はあの時買った能力の威力を上げるガムを食べた。

「さてと・・・全力でいかせてもらうわよ！」姫は目をつぶりながら正面に両手を構えた。

「集中よ・・・集中しなきゃ・・・」姫は目をつぶりながら集中力を高め、音で忍者の位置を見つけ出した。そして正面に忍者が来た瞬間、

「吹っ飛びなさい！！エレクトリック・レールガン超電磁砲！！」姫の両手から放たれた巨大な雷の光線は忍者へと直撃した。

「ぐっ！！！！無念！！！！」光線は忍者へ当たったまま、壁に直撃し、壁が崩れ、忍者は外へと落ちていった。

「終わったわ・・・ガムの副作用が出る前に、紅蓮の援助へ行かないと・・・」

姫は紅蓮が向かったほうへと走り出した。

「その頃剛は・・・」

「ここらへんでいいかな？」

「やっとですのね」女の子はぬいぐるみを地面に置いた。

「私の名前は雨森 花子ですの。」と言う声と共に、花子は剛の後ろへと回っていた。

「そこか！」剛は殴りかかった。

「そこじゃないですよ！」花子は空中にいた。

「空中なら避けられないだろ！」剛は殴りかかった時に使った手を地面へとつけ、逆立ちのようにして花子に蹴りをいれようとした。

「遅いですわね。じゃあ次は私が鬼の番ですわね」花子は横にいた。

花子は一瞬の間に剛の腹を5〜6回殴った。

「ぐう！！こいつ・・・速い！！」

「私の能力は・・・そうですわね・・・ハイスピード・ゾーン光速地帯といったところで

しょうかしら」

花子は笑いながら言った。

NO.25 「究極忍術」 (後書き)

感想・評価等お待ちしております!!
お気に入り小説登録もお願いします!

NO.26 「光速地帯」

「なんて速いんだ!?!」

「私の能力は光速地帯ハイスピード・ゾーンと言われるほど速いのですよ。

そろそろスピードアップの時間ですの。アクセル・ファースト加速?!!」

すると、花子の速度がまた上がった。そして、どんどん攻撃を入れられていく。

「ぐふ!!」一発でも与えられれば勝てるというのに……」

剛は無差別に水の弾を撃ち始めた。

「そんなの当たりませんわ!!」花子の攻撃は止まらない。

「当たらなくてもやるしかないだろ!!」

「全く……バカですわね!加速?!!」アクセル・セカンド

花子の速度はまた上がった。

「ぐはああああ!!」とうとう剛の体に切り傷ができて始めた。

「ああああ、血がでてますわよ!」花子の猛攻は止まらない。

しかし、剛は水の弾を色々な箇所に撃ち続けた。

「だから……あたらないっていつてるでしょ!!」

「もしかしたら当たるかもしれないだろ!!」

「そんなことありえないのですよ!!加速?!!」アクセル・サード

ブシューウウウウウ!!

剛の体にはとうとう、切り傷ではなく、刃物が刺さったような深い傷がたくさんできてきた。

しかし、剛の乱射は止まらない。

すると、奇跡的に一発が花子に当たった。

「どうだ?痛いだろ」

「もう許しませんわ!!加速?(アクセル・フォース)!!」

花子はさらに加速した。どんどん剛の体に深い傷ができていく。

剛の体の皮がどんどんはがれていき、そこから血が染み出るようになっていく。

「ぐっ!!」剛の顔は強烈な痛みにより、歪んでいた。

「もう可哀想ですし、とどめといきましょうかしら……さようなら!!加速?(アクセル・ファイナル)!!」花子は一瞬地面に立ち止まってから、右手を刃物のように鋭くして、勢いよく地面を蹴り出した。

「甘いんだよな……それが!!」剛はニヤリと笑って言った。

花子は地面に倒れこんだ。

「どうして!?!」

「今まで俺が水の弾を乱射していたのは、お前を狙っているわけではなかったんだよ。

お前が地面を蹴る瞬間に床を水浸しにしておくことで、摩擦力を失わせ、加速することはもちろん、

転んで走ることができなくなるのさ!これでとどめだ!!水暴龍!

ウォーター・クレイジードラゴン

!

「いやああ!!」暴れる龍は花子に突進して、唸り声を上げて壁へと突進した。

壁と龍の間に挟まった花子は気絶していた。

「終わったな……紅蓮……頑張ってくれ……俺は少し休憩していく……」

そう言っただけで剛は地面に倒れこんだ。

くその頃紅蓮は……

「でてこい!!富士谷!!」俺は屋上へと上ってきた。

「もう来たのかい……随分と早いね……」

「俺と勝負だ!!」俺は富士谷に右手を向けて言った。

「わかったよ。今度は本気でいかせてもらうけどな。」富士谷はニヤリと笑って言った。

しかし、富士谷の瞳は確かに殺気に満ち溢れていた。

本当の戦争が、今始まる・・・

NO.27 「決戦」

「この前とはもう違うんだ！炎砕鎧デスフレイム・ハンマー！！」

俺の手に、炎をまとった大きなハンマーが形成されていた。

「つぶれる！」俺はハンマーを富士谷の頭に叩き付けた。

「全くもう・・・あぶないじゃないか。逆撫さかなでのがせノ風！」

富士谷は頭に振ってくるハンマーをやさしく撫でるように触ると、強烈な風が吹き、ハンマーの向きが変わり、攻撃がはね返されてしまった。

「全く君は進化してないようだね・・・次はこっちの番だよ。混沌こんとノ舞風んのまいかせ！」そう富士谷は言い、俺の体を刀で斬るように手を斜めに動かした。

ブシューウウ・・・という音と共に、俺の体が富士谷の手の動きと連動して、斬れた。

「ぐっ！！」俺は強烈な痛みに耐え、手の甲を合わせた。

「もうその技は通用しないってば」

「それはどうかな？」紅蓮はニヤリと笑っていった。そして、合わせていた手の甲をゆっくり伸ばし始めた。

するとその手の甲から一本ずつ、炎が固まってきた、赤い色の鎌のような滑らかなカーブを描いた刃が形成された。

「一本でも二本でも変わらないぞ！」富士谷は俺のほうへと走ってきた。

「それがちがうんだよな！制裁ジャッジメントノ炎鎌ヘルクロウ！！」

俺は走ってくる富士谷の横を通り過ぎた。

「ぐはあ！！！」富士谷の腹には二つの切り傷ができていた。

「・・・どうやら君は僕を怒らせたようだね」富士谷の顔が殺気に満ち溢れた瞬間だった。

「ここで消えろ！迅速クイックの風エア！」富士谷はまた一瞬で俺の背後へと移動していた。

そして、俺の体には無数の切り傷がついていた。

「ぐう！」俺はよろけた。しかし、ここで負けたらみんなに顔を合わせる事ができない。

「俺は……俺は……負けられないんだよ！！！！」そう俺が叫んだ瞬間、

体中の色が真っ赤に変わり、背中には大きな龍のマークができた。

「うぐう！！」それと同時に全身に強烈な痛みがはしる。

「あれは！？……魂の開放だというのか！？」富士谷は言った。「なんだそれは……」俺は聞いた。

「体に神の力を宿しているもののみが使える能力のようなものだ。

しかし、強靱な力とともに生命力をどんどん神に吸収され続けるので、その状態を保ち続けると死ぬと言われている……」

「じゃあ今の俺は強くなってるんだからお前のこととつと倒せばいいんだな！」

俺は富士谷の方へ走りだした。スピードも格段と上がっている。

ジャッジメント・ヘルクロウ
制裁ノ炎鎌！！」俺は手の甲からはえた二本の鎌で富士谷を斬りつけた。

「ぎゃあああ！！」富士谷は強烈な痛みで顔を歪めた。

「どうやら……僕も使うしかないようだね……魂の開放！」そう言つと、富士谷の体からも凄い風が吹き出し、俺は吹き飛ばされた。そして、富士谷の方を見ると、

富士谷の背中には風でできた翼と、大きな駒イタチのマークができていた。

「君だけが開放を使えると思つたら大間違いだよ！上昇気流フライング・エア！！」

そう言つと、富士谷は背中の翼を使い、空へと舞った。

「俺だって！！龍炎噴射ドラゴン・ファスト！」俺の足から今までとは全く色の違う、綺麗な赤色の炎が噴射され、俺も空に舞った。

「……さてと……はじめようか！」

「どつちが強いか……白黒つけようじゃねえか！」

NO.27 「決戦」 (後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.28 「天に舞う焰龍（えんりゅう）と風鼬（かぜいたち）」

俺は二つの鎌を富士谷へと向けて接近した。そして、大きく鎌を振る。

「そんなもの効かないよ！」富士谷の体から突風が吹いて、俺は吹き飛ばされた。

「ぐっ！もう一発！」俺は足からでている炎の出力を上げてもう一度富士谷へと向かった。

「何度やつても無駄さ！」

「確かにこのリーチでは無理だよな」俺はニヤリと笑って言った。

そして、右手へ意識を集中させた。するとメキメキという音を立て右手の鎌の刃先から新たな炎が生まれ、先程の2倍近くまで刃物のリーチが伸びた。

「これならいけるだろ！」俺はその刃を富士谷の肩へと振りかざした。

「逆鱗げきりんのなきノ尻！」富士谷は鎌が当たる瞬間に、ものすごい風を吹き出し、刃が当たるのをギリギリで防いだ。

「ぐっ！！まだまだああ！！」俺は右手だけでなく、両手で鎌に力を入れ、富士谷の肩に傷をつけようとする。

「こつちだつてえええ！！」富士谷もその鎌を受け止めるべく、風の出力を上げた。

「負けられないんだよおおお！！」俺は歯を食いしばってさらに力を入れた。

グサリ……という音と共に富士谷と肩に、浅いが鎌が刺さった。「痛っ！……こつちだつてええええ！！」富士谷は鎌が肩に刺さ

つたまま、右手を俺のほうへと向けてきた。

「風鼬エアバット・デスサイクスの殺鎌！」富士谷の手から一瞬で俺の体へと強烈な風が飛んできて、体に大きな鎌で斬られたように傷ができた。

「ぐっ！！」俺もその仕返しとして鎌を富士谷の肩へと深く刺す。

「ぎゃあー!!」富士谷は一瞬ひるんだ。

「今だ!」俺はその一瞬を見逃さず、足の炎の噴射を上げ、勢いよく富士谷に接近すると同時に、富士谷にアッパーをきめた。すると、富士谷は地面に対し背を向けた。

「狙い通りだ!」俺は鎌を普通の炎に戻し、戻した炎を右手にまとわせ富士谷の腹へと当てた。

「俺の炎は少々響くぜ・・・炎旋削!!」俺は富士谷の腹を全力で殴った。

「がはあ!!」そのまま富士谷は地面へと落ちていく。

そして、地面にぶつかり大きな砂ぼこりを上げた。

「・・・やったのか?」俺は砂ぼこりが消えるのを待った。

砂ぼこりが消えた。しかし富士谷はどこにもいない。

「後ろだ!」俺が振り向くと富士谷は俺の背後にいた。

「やられたらやりかえす!それが俺のモットーだ!狂風破拳!!」
富士谷は右手に風をまとい、俺の顔を殴った。

俺は吹き飛んでそのまま学校のガラスへと衝突してガラスを突き破る。

俺は痛みに耐えながら立ち上がると横から高森と鯖島が息をきらして走ってきた。

「紅蓮!・・・こんな戦争・・・もうやめて!!」

「ダメだ!まだ俺は富士谷を倒していない!」

「そんなことどうでもいい!富士谷さんもいるんだろ!早くこつちへきてください!

今の現状を説明します!」鯖島はそう言い、外の富士谷を呼んだ。

「一体なんなんだ!今いいところだったのに!」富士谷はキレ気味に言った。

「そんなことより大変です!!工藤にAKUMAの卵が埋め込まれていたようで、

その工藤が現在、AKUMAの完全態になろうとしています!」

「なんだと!?!」

NO.28 「天に舞う焰龍（えんりゆう）と風鼬（かぜいたち）」（後書き）

感想・評価お待ちしております！

NO.29 「AKUMA撃退作戦」

「おいおい、そのAKUMAってなんなんだ？」俺は聞いた。

「ああ、AKUMAって言うのは……」「鯖島はめんどくさそうに話し始めた。

10分後……

「なるほど……そのAKUMAっていうやつの実験のためにこの能力決闘会をしていて、

そのAKUMAってやつが俺らを潰しに来るってわけだな」俺はちやんと理解した。

「そんなことより、旭山さんが危ないで！さっきそのAKUMAと戦ってたんや！」

「そうだ！それに黒澤と下田も言ったんだった！連絡してみるか」俺は思い出し、無線で黒澤に連絡を取った。

「もし……もしもーし」

「ああ、紅蓮ですか。只今そちらに向かっています。旭山さんは気絶していただけでした。

あ、あとおみやげも持ってきていますよ」

「おお、よかった。おみやげか……それは楽しみだな。んで、おみやげって何？」

「化け物です」

AKUMAじゃねーか！俺は『プラモル』とか『ご当地じゃこ』とか期待してたのに！

という感情を抑えながらも俺は、

「早く戻って来いよ！」と言った。すると鯖島が、

「ちよつとそいつに聞きたいことがある……代わってくれ」と言ってきた。

俺は鯖島に無線機を貸した。

鯖「おい、そいつの背中になんか変なもんないか？」

黒「ちょっとまってください・・・下田君。あいつの背中になにかあるか見てくれ」

下「わかった。・・・なんか六角形の真っ黒なものに が1つ刻まれているのが見える」

黒「だそうです。」

鯖「ツチ！もう手遅れだったか！・・・まあいい、あんたら急いで3階の理科室へ来い！それから説明する！」
「そういう鯖島は無線を俺に返した。」

「おい、どういうことだ？」俺は聞く。

「ああ、AKUMAには背中に脳のような大事な組織『悪魔の刻印』というのがある、

その刻印が腐敗した肉のような時はまだ完全にAKUMAになったわけではないんだ。

しかし、戦闘を繰り返していくとだんだん刻印が黒くなって固まっていき、

最後には石のようになって簡単には壊せなくなるんだ。

そして、その刻印に刻まれた の数がAKUMAのレベルで、

の数が増えれば増えるほど強力なAKUMAだということらしいんだ。」

「なるほど。じゃあその刻印をぶっ壊してこればいいんだな」俺はそう言った。

「やめとけ！今の俺らは魂の開放をして、生命力を格段と消費している。」

これ以上戦闘をしたら死ぬぞ！」富士谷は言った。

「じゃあどうすれば・・・」

「俺とお前が協力すればなんとかなるかもしれない・・・しかし、生命力の下がった俺らだ。死ぬ可能性が高いぞ。」

「それでもやるしかない！」俺は言った。

「まったく、面白い奴だぜ。いいだろう、行くぞ」

「お前がしきってんじゃねーよ！」
「そう言い、俺と富士谷は理科室

をあとにした。

「なんだかんだであいつら似てるんじゃないか」鯖島は笑いながら言った。

「そうやな・・・紅蓮、富士谷、絶対死ぬんじゃないで！」高森は自分の無力さに痛感しながら言った。

「さてと・・・こちらへんか」

「おい、アレだ」富士谷が指をさした方向に、旭山を担いでいる下田と、それを援護する黒澤の姿が見えた。

「おい！黒澤、下田！もうここは俺達に任せて理科室へ運べ！」

「わかりました。ありがとうございます」黒澤はそう言い、最後に霧でAKUMAに切り傷をつける。

グオオオオ！という叫びをAKUMAはあげた。

「だいぶダメージは与えときました。それでは」黒澤は俺達の後ろへと走り去っていった。

「・・・さてと。僕らも行くか」

「そうだな」俺と富士谷はAKUMAに右手を向けそう言った。

NO.29「AKUMA撃退作戦」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.30「闇桜島」

「俺が囷にやってやる！その間にお前は奴の刻印を破壊しろ！加速
流風！」ツブ・エア 富士谷はそう言い俺の背中を触った。

風が俺を包み、AKUMAの背後へと回ることができた。

「殺ス！！」AKUMAは俺に殴りかかるうとしてきた。

「お前の敵は俺だ！風ノ咆哮！」エア・ブラスト

富士谷の口からもの凄い風が吹きつけ、AKUMAの右肩を切り落と
とした。

「ギギギギ！」AKUMAは奇声を上げた。

すると、切り落とされた右肩と傷口から筋肉の繊維がでてきて、
不完全ではあるが傷がある程度治って、腕が再び機能し始めた。

「ぐっ！まだだ！旋風ノ乱斬！」せんがうのらんざん

富士谷は両腕をAKUMAに向けた。

すると、両腕から風でできた刃が一本ずつ生えた。

「この技は今の体ではきついな……」富士谷はAKUMAを横
切った。

それと同時にAKUMAの右腕、左足が吹っ飛んだ。

「グオオオ！」AKUMAはまた回復しようとし、筋繊維を伸ばし
始めた。

「今だ紅蓮！刻印を破壊しろ！」

「もう準備完了だ！焰龍ノ死息！」サラマンド・デスブレス

俺は体を半身（やや横向き）になり刻印に右腕の照準を合わせ、
足を大きく開き深呼吸をする。

「詰み！」俺の右腕から刻印へ向けてもの凄い火力の光線がでた。
チェックメイト

「俺ガ人間ゴトキニ！人間ゴトキニイイ！！！」

AKUMAは炎に巻き込まれた。

「……しかし、これはやりすぎかな……」俺と富士谷はAKU
MAを見た。

A K U M A は刻印もろとも、灰と化していた。

「まあそんなのはどーでもいいだろう。問題はこれ以上に強力な A K U M A が、日本に上陸するということだ。

間違いない日本は壊滅するな……」富士谷は頭を掻きながら言った。

「じゃあ俺らはどうすれば……」

「A K U M A を生産している秘密工場が北海道の上に建設された、

『やみやくらしま闇楼島』というところにあるらしい。その島へ行き、工場をぶち壊せばいいんだが」

「やってやるうじゃねーか！」俺は即答した。

「フッフ、そう言うと思ってたぜ……」

わかった、俺達で行こう。しかし、大人数での島への侵入は厳しい。俺7人とお前ら7人の上陸の日にち、場所を変更して行こう。詳しく

は全員を集めて理科室で説明する。」富士谷は笑いながら言った。

「……わかった。」そう言い、俺と富士谷は無線で理科室にメンバーを集めた。

NO.30「闇桜島」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

俺達のグループと富士谷のグループは理科室に集まった。

そこで富士谷が全員集まったことを確認してから話し始めた。

「みんな、今は能力決闘会なんて場合ではないということとはわかってるな？」

それだ。工藤のようなAKUMAを製造した能力決闘会総合会長は、

北海道の閻桜島を拠点とし、全日本中を侵略し、1ヶ月で世界にまで手をだそうとしているらしい。

そこで俺達は閻桜島に乗り込み、研究所を潰そうと思う。

俺達は2週間後、紅蓮達は3週間後に船で侵入だ。ここまでで質問ある人」

「はたして俺達含め14人で勝ち目があるのでしょうか？」黒澤は聞いた。

「それはないな。・・・しかし、俺達以外にもこの情報を聞きつけて閻桜島に侵入しようとしている奴らはたくさんいるんだ。例えば、お前らの中学校のグローリア率いるA組とか・・・」

グローリアも来るというのか!?!?..これは頼りになりそうだ..
..と俺は思った。

「なるほど...それなら潰せる可能性もありますね。」黒澤は頷いて言った。

「じゃあ続けるぞ。そこで、まず北海道に向かうことにする。

俺達は3日後に出発する。紅蓮達じゃそれから一週間後、つまり10日後に出発してくれ。

ここは東京だから、それくらい余裕を持って出た方がいいだろう。じゃあこれで作戦決定でいいか？」

俺達全員は頷いた。

「これから本当の戦争が始まるのね...」姫は理科室の窓から外

を見ながら言った。
外はこれから壮絶な戦争が起こることを知っているかのような曇天だった。

それから俺達は毎日修行をしていた・・・

俺は一人で森にこもっていた。

「畜生！・・・あんな化け物に本当に勝てるのかよ・・・」俺は木を叩きながら言った。

この9日で自分の力は相当ついた。しかし、俺はまだ不安でしよ
うがなかった。

「こんなんじゃないダメだ！」俺が再び修行を再開しようとした時、姫からメールが来た。

「なになに・・・？駅前集合？」俺は修行をしたかったが、行かなかったらAKUMAに殺される前に姫に殺されてしまうのでしよ
うぶ行くことにした。

俺が駅についたには他のメンバーは全員揃っていた。

「今日が平和な一日の最後よ。みんなで最後に楽しく遊んじやいま
しよう！！」

「おいおい・・・俺は修行してたかったんだぞ」俺は言った。

「今日くらいはいいんじゃないのか？」剛は言った。

「・・・わかったよ。どこ行くんだ？」

「コレを見なさい！！なんと、今日はお祭りよ！！」姫はチラシを
見せてきた。

そして俺達はお祭りに行くことにした。

「最初はみんなで金魚つりね！負けた人がたこ焼きをおごるのよ！」
姫は嬉しそうに言った。

「僕達もやりましょうか。僕初めてなんですよ、こういうの」黒澤は言った。

早速みんな金魚をすくい始める。

剛はとても上手に尻尾だけをポイの外側にはみ出させるようにして、器用にすくっていく。

「あーもう苦手だわ!!」姫は不器用なようだ。

そして金魚に電撃を浴びせて瀕死状態になって動かなくなった金魚をすくっている。

これは「金魚すくい」なのか!? できれば誰か姫の電撃から金魚を救ってくれ! とうまいことを言っただや顔をしている俺は早くも破れてしまった。・・・まだ2匹しかとってないよ!

横にいる高森も破れてしまった。

「あーあー・・・終わっちゃったね」俺は話かけようとしたが、高森は能力でポイを修理してもう一度やり始めた。

「それ反則だろ!! 俺のモノおしてくれよ!」と俺が言うと、
「・・・ツハ」と鼻で笑いながらざまあみると言う顔をしてきた。

残酷だ。残酷すぎる・・・

黒澤は順調のようだ。初めてのくせに筋がいい。

旭山さんはどうせダメなんだろうな! と思って俺は見てみた。

「あぁー・・・できませんー!・・・とても可愛い! 可愛すぎる! と俺は思っていたんだが

「そうだ! こうしよう!」と言って旭山さんが取っ手のほうで金魚を串刺しにして取っていた光景を見た瞬間俺は一瞬で可愛いと思っ
てしまった自分が恥ずかしくなった。

下田は手ですくっている。論外だ。

そして金魚すくいが終わって、もちろん俺が負けて全員にたこ焼きをおどるはめになった。

「ちくしょう・・・俺の諭吉が!」俺は、歌った。

そんな諭吉いちまんえんにさよならバイバイ とポケットモンスターの変え歌を歌った。

あれ？なんでだろう？・・・涙が止まらないや・・・グスン
としょんぼりしてる俺の横でたこ焼きをみんなが食べてる。そこに
姫が寄ってきて

「紅蓮も食べなよ！・・・あゝん」と頬を赤くしながら言った。
びやあゝあゝあうまひいゝいゝと思いつながら俺は食べた。

そして花火が打ちあがり始めた。

「今日は楽しかった・・・これで最後になるかもしれないのね・・・
」姫は言った。

よく見ると姫の頬には涙が流れていた。

「それは違うな・・・俺達は絶対ここに帰ってくるんだ！その涙
はもう一度帰ってきたときまでとっとけ！」

俺がそう言つと姫は俺に抱きついてきた。・・・こういうのもたま
には悪くないよね？

「今日はもう帰るか」剛は言った。そして俺達は家へと帰っていっ
た。

「明日が出発か・・・」俺は拳をぐつと握り思つた。

絶対に研究所をぶつつぶしてここに帰ってくる！俺はそう思い深い
眠りについた。

NO.31(終)「襲撃準備！」(後書き)

第一章〜能力決闘会編〜はこれで終了です。

これから第二章へと入っていくので宜しく願います！

感想・評価お待ちしております！

NO.32 (始) 「奇襲」 (前書き)

第2章「閻桜島侵入編」に突入しました！

初めて見る方は1章読んでいただけるとありがたいです。

とりあえずぼちぼち更新していくので宜しくお願いします！

NO.32(始)「奇襲」

あの日から10日後の朝……

富士谷達が発射してから一週間が経った。あいつらはもつたどりで着いただろうか……

そして今日、俺らが悪夢のステージへの出発する……

俺は朝早く起きた。まだ6時だ。集合は9時なのでまだまだ時間があると思いつながらTVをつけた。

ラジオ体操がやっていたので俺は久しぶりにやってみた。

「なんと気持ちのいい朝なんだ」俺はラジオ体操を終え、牛乳を飲みながら思った。

今は7時、俺は長い旅になるので最後にこの街を回ってみることにした。

俺は河川敷へと向かった。

ここで俺は色々な技の練習をしていたものだ。

その時の傷が壁にたくさんついている。「ああ、懐かしいな」と思いつながら次は紅葉中へと向かった。

「そういえばここが俺達のチームでの初めての戦闘だったんだな……」

俺はその後、ボウリング場へと訪れた。

「ここでは俺が惨敗だったんだな……姫があんなにボウリングが強かったのは驚きだったぜ」

と思いつながら次に遊園地へと向かった。

「ここでは俺は色々な地獄を見たもんだな。そう言えばここが富士谷を知ったきっかけだったな。」

俺は富士谷のことをちよつと心配しながら港の倉庫へと向かった。

「あの時、富士谷は本当にイヤな奴だったぜ。しかし、あいつの強さに本物の恐怖を抱いたんだよな」

俺は姫を誘拐したことを決して許していない。しかし、それはもうしょうがないことなのだと思います、今回の闇桜島の作戦に賛成したのだ。そして最後に緑ヶ丘中へと行った。

「ここで、俺の新しい『魂の開放』という特殊能力を見つけたんだつたな。

あとここがAKUMAとの初めての戦闘だったな。あの時のスリルは大きかったぜ」

俺は今までの思い出の場所をだいたい全て回った。

時計を見るともう8時40分だった。

「そろそろ行くか」俺は最後の思い出の場所へと向かった。

それは、光中だ。今まで俺達の通っていた学校。たくさんの仲間と出会えた学校。

そして、俺の誇りの中学校だ。

俺は光中へ行こうとした。しかし、途中で本来ありえない物を見てしまった。

AKUMAだ。絶対にありえない。まだこっちには攻めにこないはずではないのか!?!?!

俺はそう思いながら光中へ行こうとすると、AKUMAに気付かれた。

背中 of 刻印を見た。・・・どうやらレベル1のようだ。

「つたく、なんでお前がここにいるんだよ! ヘルフレイム・エッジ 紅蓮刃!」

俺は手のひらを合わせ、引き伸ばしていき、刀を形成し、軽くAKUMAの刻印をぶっ壊した。

やはりここ数日の修行で威力が格段と上がっている。

俺は自分の実力に自信が持てた。

「さて・・・学校に向かうか」俺は学校へと向かった。

しかし、そこにあつたものは学校ではなかった・・・

それはAKUMAにより、メチャクチャにされており、

ガラスは粉々に割れていて、壁にはたくさんの血がついていた。

そして、AKUMAが学校内にうじゃうじゃいる。

「あいつら！大丈夫か！？」俺は無線機で連絡を取った。
しかし、誰とも全くつながらない。

「畜生！なんでAKUMAがいるんだよ！」俺がそう言った時、
学校内3階から稲妻が走って、AKUMAが何体か落ちてきた。

「姫！学校の中にいるのか！」俺は急いで学校の中へと入っていった。

NO.32(始)「奇襲」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.33 「殺戮の墮天使」

俺は学校内の廊下を駆け抜けて、階段をのぼる。

階段の途中にAKUMAが何体かいた。

「邪魔なんだよ！^{ヘルフレイム・エッジ}紅蓮刃！」

俺は手のひらを合わせ、ゆっくりと伸ばしていく。そして、一本の炎の刃が左手に形成された。

俺はその刃をAKUMAの攻撃を避けながら刻印を破壊していく。

一瞬で先程までのAKUMAは地面へと倒れこんだ。

俺はそのまま3階へとのぼっていく。

しかしそこには今までのAKUMAとは違い、背中から一本だけ真っ黒の翼が生えている墮天使のようなAKUMAがいた。

「才前ヲ・・・殺ス！」そのAKUMAは俺に突進してきた。

腕は斧のように変形しており、その斧のような手を俺の肩に振りかざしてきた。

「つぐ！！」俺はぎりぎりの所で刃で斧を受け止めた。

「甘い！」AKUMAは俺の腹に蹴りを入れてきた。

俺は壁へと吹き飛んだ。そして起き上がった瞬間、AKUMAは目の前に接近してきていて、

俺の肩に斧を振りかざしてきた。

「ぐわあああ！！」俺の肩に斧が落ち、大量の血が飛び散る。

それと同時に、俺は奴の足に刃を突き刺した。

AKUMAは悲鳴を上げ、後ろへと下がった。そして、もう一度斧を構え接近してきた。

「ここで殺す！^{フレイム・ブレイクランス}炎破槍！」

俺は右肩の傷口ごと炎に包み、右腕の炎の槍へと変えた。

「死ネエエエ！」

「うおおおお！！！」

AKUMAの斧は俺の頭ギリギリで止まった。

そして俺の槍は、胸から刻印を確かに貫いていた。

A K U M A は地面に倒れこむ。それと同時に俺は右腕の槍を解除した。

激痛が体に走る。しかし、俺はさつき電撃が見えた方へと走り出した。

そこには大量の A K U M A がいた。何体は地面に倒れている。

再びその A K U M A の大群の中から電撃が飛び散り、A K U M A が吹っ飛んだ。

俺はとりあえずその A K U M A の群れへと突入し、奥へと進んでいく。

すると、奥には腕や腹から血を流している姫がいた。

「一体何があつたんだ!？」

「私にもわからない・・・でも、外全体が A K U M A だらけになってて、

私はとりあえず学校の中に逃げ込んだの。そしてこいつらから逃げたのよ・・・」

「とりあえず今は音楽室へと逃げよう!話はそれからだ!」俺は姫を背中に乗せ、

音楽室へと向かっていった。A K U M A がそれを邪魔する。

俺は左手の刃で消火器を斬り、でてきた粉で A K U M A 達に俺達の姿が見えなくなるようにした。

そして A K U M A 達が俺らを探している隙に音楽室へと逃げ込んだ。

「それで一体何があつたんだ?」

「私達はもう集まっていて紅蓮が来るのを待っていたの。でもこの騒ぎでみんなとはぐれちゃった。」

「じゃあメールで連絡しておくか」俺はケータイを取り出し、全員に音楽室に來いと連絡した。

そして、音楽室に黒澤と下田と剛がやってきた。

「おい、旭山と高森を知らないか?」俺は3人に聞いた。

しかし、誰も知らないと答えた。その時、校内放送がかかった。

「ミナサンコンニチワ〜！ドウデスカ？私達ノ用意シタイイベントハ
楽シンデ頂ケマシタカ？」

「誰だ！！」俺は叫んだ。

「私ハ、闇桜島ノ主デス。ココニ大量ノAKUMAヲ送り込ミマシ
タ。

ソシテ、アナタタチノ仲間ノ二人ハ預カリマシタ。」

「ふざけんな！！お前をぶち殺しに行くから待ってる！！」

「・・・マアココカラデラレタラデスケドネ」という音声と共にド
アが壊された。

そして、AKUMAが押し寄せてきた。先程のレベル2もたくさん
いる。

・・・これって・・・ピンチじゃない??

NO.33 「殺戮の墮天使」 (後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.34「そんな脱出方法で大丈夫か？・・・大丈夫だ、問題ない」

ドアが壊され、大量のAKUMAが入り込んでくる。

「ここは俺と黒澤で食い止める！その間に脱出方法を考えてくれ！」
俺は両手から炎の刃をだし、押し寄せてくるAKUMAを切り裂いていく。

イマジン・ワールド
「幻想ノ世界！」黒澤も霧をだして攻撃する。

AKUMAはどんどん倒れていくが、また奥からどんどん出現する。
「全くキリがないぜ！」俺は刃を振りながらつぶやいた。

「僕に任せてください！」黒澤はそう言うと、目をつぶった。

ボイス・フック・ウォール
「毒霧壁！」

すると、壊されたドアの所に赤紫色の霧が壁のようになってふさいだ。

AKUMAは霧を壊そうとしたが、触れた所からAKUMAの体が消滅していく。

「この霧は強力な毒性を持っています。触ったら皮膚は溶けてしまいますね」

なんだこいつは！？チートなのか？そんなのか！？と俺は疑問に思ったが、

今はそんなことどうでもいい。ここを脱出しないと・・・
すると剛が、「おい、ここから飛び降りるってのはどうだ？」

んー？？今なんていった！？ここは3階だぞ！？失敗したらドンマ
イじゃ済まされないぞ！

「いや、この机とかを地面に落として
その上に落ちれば衝撃を吸収できるんじゃないのか？」

できるわけねーだろ！むしろ痛いわ！

「それはいけるかもしれませんがね」

黒澤！なんでお前はできると思ってただよ！もう少し考えろよ！

「じゃあ行くわねー」姫は大量の机を地面に落としてから飛び降り

ていった。

馬鹿な奴だ・・・俺はそう思いながら地面を見た。

「全然痛くないわよー」

なんで痛くないんだよ！！お前が丈夫なのか？それとも机がスポンジでできているのか？

「おいおい、こんな脱出方法で本当に大丈夫か？」俺は剛に尋ねた。

「大丈夫だ、問題ない」

俺は知っている。大丈夫だ、問題ないって言うのは死亡フラグなんだぞ！

「もうこの霧の壁も長くは耐えられせん。早く落ちてください」

「もういいノック・・・」俺は覚悟を決めて飛び降りた。

神は言っている・・・ここで死ぬ運命さだめではないと・・・

俺は机にダイブした。机とぶつかった後、華麗に3回転くらいした。致命傷は避けられたものの、鼻をおもいつきり強打し鼻血が止まらない。

「大丈夫ですか？」気付いたら黒澤と剛と下田は横にいた。

「なんでお前らケガしてないんだよ!？」

「いや、霧に乗ってきました」黒澤は笑いながら言った。

「俺も乗せるよ!!!」

「私もケガしてないわよ」

「お前は色々とおかしいんだよ!!」

「まあまあ降りられたんだしいいだろ」剛は言った。そういうお前も同罪だコノヤロー

「んで、どうするんだ？旭山達を助けるのか？」下田は言った。

「もちろんだ!!場所を教えてください」

「そういうを思ってたぜ。場所は・・・埼玉県にいる。急げば間に合うぞ」

「じゃあ追っぞ！」俺は走り出そうとした。

「ソウハサセナイゾ!!」そこに巨体のAKUMAがやってきた。体は鎧のような殻で包まれており、尻尾が発達している。

「こいつは、レベル3だ。」下田は言った。

「オ前ヲヲ・・・殺ス!!！」

「上等だコノヤロー!!！」

NO.34「そんな脱出方法で大丈夫か?・・・大丈夫だ、問題ない」(後書き)

感想・評価お待ちしております!

「殺ス!!」AKUMAは俺に飛び掛ってきた。俺はパンチを繰り出してきた。俺は、軽く避けた。

すると、奴の拳は地面に当たった。そして、地面が粉々に吹き飛んだ。

「なんとという破壊力だ」剛は啞然として言った。

「なにボケつとしてるんだよ!とつとと倒すぞ!」俺は言った。

「私の番ね!少し時間を稼いで!」そう言つと、姫は充電を始めた。

「なら任せろ!」そう剛が言つと水の球をつくりだし、

その球の形を変形させていき、日本刀のようにした。

そして、剛はAKUMAのほうへと走り出した。

「邪魔クサイ!」AKUMAは剛を大きな手で殴った。

「おいおい、もっと狙つてやれよ」剛はかわした。

「腕八二本アルダゼ!」AKUMAは反対の手で剛を殴った。

「剛!」俺は叫んだ。

「・・・つたく、危ない危ない」剛はニヤリと笑いながら言った。

そう、AKUMAの手を切り落としていたのだ。

「ウギャアアア!」AKUMAは唸り声を上げた。

そして、傷口から糸のようなものをだし、修復しようとしている。

「させねえよ!五月雨ノ型!」さみだれのかた

剛は刀を奴の右肩へと振りかざした。

AKUMAの右肩がぶつとりと骨ごと切り落とされた。

「ギャアア!」AKUMAは修復をしようとしたが、できない。

どうやら、こいつらは骨を切断されるとその傷を修復することができなくなるようだ。

AKUMAは反対の手で切り落とされた腕を持ち、姫の方に投げ飛ばした。

「危ない!」姫は充電中なのでかわせない。

姫にAKUMAの腕が当たる瞬間に、姫の体の周囲を霧が覆い、腕は黒澤の霧にあたると、はじけとんだ。

「姫さんの護衛は僕に任せてください」黒澤はニヤリと笑いながら言った。

「さてと、次は俺の番だ！」俺は腕に炎をまとった。

腕がものすごい炎を吹き上げる。

そして、俺は足の裏から炎を噴射し、AKUMAへと一瞬に接近した。そして殴りかかった。

「フタエノキワミ！」

「ジャマダ！」俺はAKUMAの平手打ちを喰らった。

「ア」-！！」俺は簡単に吹き飛ばされ、学校の塀に直撃した。

調子に乗ってる うに剣心の名言を使つてすいませんでした・・・俺は、そう心で謝罪をして立ち上がった。

AKUMAは俺の目の前に来ていた。

「邪魔なんだよ」俺は奴の蹴りをかわし、懐に入る。

そして右足に炎をまとい、そのまま腹へと蹴りを入れた。

AKUMAは吹っ飛ば。しかし、俺は先程の恨みを忘れてはいない。

「まだまだだぜ！」俺は足から炎を噴射し吹っ飛ばAKUMAを追いかける。

AKUMAに追いついた俺は、奴の頭上へと上昇し、炎をまとった右足でかかと落としを決めた。

AKUMAは地面に叩きつけられボールのように弾み、俺の正面まで跳ね上がった。

「さてと・・・もう一度やらせてもらおうか」俺はニヤリと笑い炎を腕にまとませる。

「フタエノキワミ！」俺はAKUMAにアッパーを決めた。

「グオオオオ！」AKUMAは空へと舞い上がった。

「今だ！姫！」

「充電完了よ！」そう言った姫の腕にはもの凄い電気がやどされていた。

「これで吹っ飛びなさい！超電磁砲！！！！」
エレクトリック・レールガン
姫の腕に帯電していた雷が一本の矢のようにAKUMAへと突き刺さる。

「私ガ、貴様ラ人間ゴトキニ負ケルトハ！！・・・」
AKUMAの腹に当たった稲妻はAKUMAの腹を貫通し、刻印も破壊していた。

AKUMAは地面に倒れた後、動かなくなった。

「さてと、先を急ぐぞ」俺は言った。

「でも、埼玉遠いわよ？」

「これでどうですか？」黒澤が指をさしたほうには一台の軽トラックがあつた。

「それだ！！・・・でも誰運転するんだ？」

「・・・俺は一応運転できるぞ」剛は言った。

「な、なんだって！？」

NO.35「フタエノキワミ」(後書き)

感想・評価等お待ちしております！

NO.36 「生死の賭け」

「えー!?!?!?」俺達は驚いた。

俺達は中学生だ。いくら剛がごつくて身長も高くて大人に間違われるとしても

車に運転できるとは誰も思っていなかったからだ。

「お前、本当なのか? どうせラジコンとか動かせる程度なんだろう?」俺は笑いながら聞いた。

「馬鹿を言つな。俺は本当に運転できるんだぞ。」

「どうせ嘘なんだろう!」

「嘘じゃない!」俺と剛が険悪なムードへと変わったのを気付いた黒澤が、

「とりあえず、鍵を探さないことには始まりませんよね」と言った。

「そうよ。鍵を探しましょう」姫はそう言った。

俺は一旦落ち着いて考え始めた。

・・・この車は鬼瓦先生のやつだな。・・・あの先生はいつも職員室の机に色々な鍵を入れていたはずだ。

一度俺が不要物を持ち込んで見つかったときに不要物を机の中にしまっているのを見たな。

確かにその時に鍵は入っていた。・・・もう一度あのAKUMAの大群の所に戻るといふのか?

「鍵のある場所はわかる。けど・・・」俺は言った。

「・・・けど?」姫は唾をゴクリと飲んで尋ねてきた。

「鍵は学校2階の突き当たりの場所の職員室の鬼瓦先生の机の中にあるはずだ。」

しかし問題なのは、あそこには大量のAKUMAがいることと、仮に鍵をゲットできたとしても突き当たりだから道は必然的に一箇所だけになる。

AKUMAにその道をふさがれた瞬間俺達のゲームオーバーだ。」

「つまり、囲まれる前に鍵を取ればいいのね。簡単な話じゃない。私が行くわよ」姫は笑いながら言った。

「姫だけじゃ心配だな・・・俺もいく。」

下田は無線でAKUMAの位置を俺達に教えてくれ。

剛、もしも俺達が危なくなったらAKUMAを吹っ飛ばして道をつくってくれないか？」

「ああ、任せておけ」剛は言った。

「じゃあ行こうか」

「こんなの私一人で大丈夫だけどね」そう言い、俺達は再び学校内へと走り出した。

玄関にはレベル1のAKUMAが数体いる程度だった。

「こんなやつら敵じゃないわ！雷ライトニング・ツインエッジ双刃！」

姫の手に二つの雷でできた刃が形成されていき、姫はその刃を振り回す。

ただ適当に振っているように見えたが、確実に刻印だけを破壊している。

「お前も随分強くなったよな」俺がそう言った時、後ろからAKUMAが襲い掛かってきた。

「紅蓮！危ないわ！伏せて！」姫は刃を俺のほうに向けていった。

「まあ強くなつたのはお前だけじゃないんだぜ」

俺はニヤリと笑い右手から炎の刃を出して、AKUMAの刻印に突き刺した。

AKUMAはもがき苦しんだ後、地面に倒れこみ動かなくなった。

「あんたも前まで私より弱かったのにね」

「俺だつて修行をしてたんだからな。それより早く先にいくぞ」

俺達は職員室の方へと走り出した。

「・・・見ツケタ」

その時、俺達は気付かなかつた。レベル4の存在に・・・

NO.36 「生死の賭け」 (後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.37 「脅威！Lv4」

俺達は職員室の前にたどり着いた。

「俺がここを見張っておく。お前はその間に鍵を取ってきてくれな
いか」

「任せておいて！絶対に取ってくるから！」姫は素晴らしい残り職員
室の中へと入っていった。

「さてと・・・はじめるか・・・そこにいるんだろ？」俺は叫んだ。
「モウ気付イテイタノカ・マアイイ」そう言う声と共に、

レベル2のAKUMAが3体ほど現れた。斧のように変形した鎌を
向けて迫ってくる。

「俺もいかせてもらおうか・・・」俺は手の平を合わせ、腰の所へ
構えた。

そう、今からやる技は『居合い斬り』だ。

居合い斬りは集中力を高め、一瞬で刀を振ることによって威力を底
上げできる技だ。

しかし、一步刀を振るタイミングを間違えれば逆に攻撃を受けたり、
刀が相手に届かなかつたりもする難しい技でもある。

俺は目をつぶり、呼吸を整え始めた。

「死ネエエエ！！」AKUMAは斧の手を向けながら走り出してきた。
た。

まだだ・・・もつとひきつけるんだ・・・

奴らと俺との距離はわずか20cmに迫った。

「ここだ！^{ヘルフレイム・サークルフレイド}紅蓮刃円斬！」俺は腰の所に構えた手の平を伸ばした。
灼熱に燃え上がるドロドロしたマグマが固まって緋色の刃が形成さ
れて、

AKUMAの体を切り裂いた。

「これが俺の新技だ！」俺は刃を解除すると同時に、
刻印を破壊されたAKUMAは地面に倒れこんだ。

「ナカナカ強イナ」また奥から新しい巨大なAKUMAが現れた。そこAKUMAの腹には大きな口のように裂けた割れ目があった。「お前は誰だ？・・・」そう言うと同時に、下田から無線が届いた。

「紅蓮！今そこにいるAKUMAはレベル4だ！かなり強力な奴だから気をつけろ！」

「なるほど・・・レベル4か。面白くなってきたもんだな！」

俺は今度は手の甲を合わせ、伸ばしていく。

すると鎌のようなカーブを描いた刃が一本ずつ、手の甲からでてきた。

「もつと！！もつと長く！！」手の甲の刃がさらに伸びていく。しかし、それと共に体に激痛が走る。

体から熱を生産しすぎて細胞に極端な負荷がかかり、細胞が死滅し始めたのだ。

「ホウ、コレ面白い」AKUMAは笑っている。

「これでも喰らいな！ジャッジメント・ヘルクロウ制裁ノ炎鎌！！！」

俺は長くなった鎌をAKUMAの腕に落とす。

ブツリ・・・という音と共にAKUMAの両腕が落ちた。

「コイツハ油断シテタゼ・・・」

AKUMAは腹の口を大きく開け、大きく空気を吸い込んだ。

すると、腹が膨らんでいき、先程の3倍くらいの大きさに体が膨らんだ。

「吹っ飛びナ！！」AKUMAは口を開け、吸い込んだ空気を吐き出した。

すると、圧縮されて拳くらいの大きさになった空気が腹の口から放たれた。

見えなかったが、空気の弾が腹に当たる感触を確かに感じた。

それと同時に俺は吹き飛び職員室の扉へとぶつかり、扉をぶち壊し、職員室の中へと吹き飛ばされた。

「どうしたのよ！」姫が鍵を手に取り、駆け寄ってきた。

「アー弱イ弱イ。弱スギテ話ニナラナイナ」AKUMAは職員室へと入ってきた。

「あんたが紅蓮をやったの？」

「ソウダ。コイツハ話ニナラナカッタヨ」

「絶対に許さない！！」姫は右手をAKUMAに構えて怒鳴った。

NO.37「脅威！LV4」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.38 「憤怒の雷撃」

姫はAKUMAに右手を構えた。電気が右手に溜まっていく。

「はじけ飛べ！超電磁砲！」
エレクトリック・レールガン

右手から一筋の稲妻がAKUMAへと放たれる。

「ソイツハドウカナ？」AKUMAは腹の口を開けた。

すると、また吸い込み始めた。

すると、空気と共に、稲妻が吸い込まれていく。稲妻は全てAKUMAに吸収されてしまった。

「なんで！？感電してるはずよ！」

「オイオイ、知らナイノカ？空気ツテノハ電気抵抗が大キインダゼ！ソノ空気ヲ腹のなかで圧縮させたら・・・」

「電流は流れなくなる・・・ふざけんじやないわよ！」姫は今度は両手を構えた。

「何回ヤツテモ同ジダゾ」AKUMAは口を開けて言った。

「それはどうかしら？今度は最大電圧で撃つわよ！超電磁砲！」
エレクトリック・レールガン

姫の手から先程とは比べ物にならないほどの大きさの稲妻が放たれた。

ズドン！という音と共にAKUMAに稲妻が直撃し、周りの壁まで崩壊した。

「コレハ予想外ノ威力ダツタゼ・・・」壁に埋もれたAKUMAの声が聞こえる。

しかし、AKUMAは周りの瓦礫がれきを吸い込みながら立ち上がった。

「今ノハビリビリ来タゾ・・・例エルナラ『静電気』クライダナ」AKUMAは瓦礫を全て吸収した後にニヤリと笑って言った。

「なんで！？普通なら即死並の威力なのに・・・」

「オイオイ、忘レタカ？俺ハレベル4ダゾ」AKUMAは言った。

「次ハ俺ノ番ダ！楽シカッタゾ！！」AKUMAは腹の口を大きく開けた。

「死ネエ！」AKUMAの口からさっきの瓦礫が勢いよく飛んでくる。

「きゃあー!!」飛んできた瓦礫が姫を襲う。

姫は地面に膝をつく。一瞬のうちに腕や足、腹にまでもたくさん傷ができ、血が染み出ている。

「もう腕も動かないわ・・・アレをやるしかなさそうね」

姫は痛みを耐えながらも立ち上がった。

「魂の開放!!」姫の全身から稲妻が走り、背中には大きな蝶のマークでできた。

「コレハ・・・!?!」

「驚いた?これは神の力を持つものだけの特有の能力で、

自分の生命力を代償に、強靱な力を得ることができるよう」姫はニヤリと笑い言った。

「ソレデモ俺ハ、才前二負けナイ!」

「じゃあ試してみる?」姫は既にAKUMAの背後へと回っていた。

「シマツタ!」

「もう遅いわ!雷蝶旋翔蹴!」
サンダーバタフライ・サマーソルト

姫はAKUMAへと雷をまとった足で蹴りを入れる。

「ウグウ!」AKUMAは空中へと舞い上がった。

「とどめよ!」姫は空中に舞ったAKUMAへと近づく。

「サセルカ!」AKUMAは腹の口から空気を吸い込んで姫へと放った。

「それが甘いのよ!」姫はニヤリと笑った。

すると、その奴が圧縮して吐き出した空気に手で触れた。

すると、空気の進む方向が反対へと変わり、AKUMAへと直撃した。

「ガハア!」AKUMAは職員室の天井へとぶつかる。

「終わりよ!雷双刃!」
ライトニング・ツインエッジ

姫の手に雷の双剣が出来上がる。

「ここまで楽しませてくれてありがとう。でも戦う相手を間違えた

「ようね！紅蓮の敵よ！」

「そう言い、姫はAKUMAの体を双剣で切り刻む。」

「ココマデノヨウダ・・・ギャアア！」

AKUMAは刻印を破壊された後、姫に頭も完全に潰された。

「やっと終わったわ・・・ぐはぁ！」姫は血を吐いた。

「どうやら相当の生命力を消費したようだ。」

「・・・どうなったんだ？」先程まで気絶していた紅蓮は立ち上がって言った。

「ああ、目が覚めたのね・・・無事に終わったわ。鍵も取ったし」

「おい姫！どうしたんだその血！」

「ちよつと無理しすぎたのよ・・・」そう姫が言ったと同時に天井が崩れ始めた。

「やばいな・・・脱出しないと」紅蓮は姫を担ぎ上げ、職員室をでた。

しかし、先程の通路には大量のAKUMAがいた。

「今こそ殺スンダ！」AKUMA達は一斉に走ってきた。

・・・これは、早くも死亡ですか？

NO.38「憤怒の雷撃」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.39 「死にかけてるところで助けにくる人ってかっこいいよね」

「っち！突破するしかないのかよ！」俺は姫を床に下ろし、手のひらを合わせる。

そしてゆっくり伸ばしていく。すると、炎の刃が手のひらに一本できた。

「ぐはあ！」しかし、かなりの体力を消耗している。

刃は粉々に砕けてしまった。

「くそ！戦えない！」俺は最悪の事態に焦っていたが、冷静に考えた。

・・・少ない体力で相手全員を倒す方法は・・・ないな。

でも倒さなくてもいい・・・どうにかしてよせつけないようには・・・

なにか周りにないか？・・・そして俺はあるものに気付いた。

「ガラスだ！」俺は両手を周りの窓ガラスに構えて、

ビー玉くらいの大きさの火の弾を乱射した。

このサイズなら体力の消耗も少なくできる。

そして、ガラスの破片が床にちりばめられた。

「クツ！小細工ヲ・・・！構ワナイ、ツッコムゾ！！」

AKUMAはガラスを無視してつつこんできた。

「ギヤアア！！」AKUMAの足にガラスの破片が刺さると同時に悲鳴を上げた。

AKUMAの足から血がでている。

しかし、AKUMAは傷を修復しようとはしない。

なぜなら、このまま修復してしまったらガラスの破片が足の裏に入ってしまった傷が修復してしまうからだ。

しかしAKUMAも馬鹿ではない。

ガラスを踏ませたのはレベル1の奴らで、レベル1を土台としてレベル2のAKUMAがジャンプしてきた。

「死ネエエ!!」AKUMA達は斧のような手で攻撃してきた。

「やばい!殺される」俺は目をつぶった。すると同時に剛の
声が聞こえた。

「鍵はちゃんと取れたか?」剛とその後ろにいる水暴龍がAKUMAを蹴散らしてやってきた。

「何ヲシテイル!トットト殺セ!一人増エタダケダロ!」

俺達の目の前のレベル2のAKUMAが言った。

「そんな一人に殺されるのがお前の運命だ!」剛は指をパチンと鳴らした。

すると龍が涙を流した。そして、その涙が一本の矢となって剛の手に現れた。

「こいつでまとめてふつとばす!世破滅ノ龍矢!」
ワールドブレイク・ドラゴンアロー

剛は矢を地面へと放つ。すると、矢は地面に溶け込んでいった。

そしてAKUMA全員の刻印に青い色の六角形のマークができた。

「ナンダコレ!トレナイゾ!ナニヲシタ!」AKUMAは動揺している。

「まあこういうことさ!」剛はニヤリと笑って右手を開いて上に突き上げた。

「とどめだ!」剛が右手を握った瞬間に、

六角形のマークが光りだし、刻印に矢が突き刺さっていた。

AKUMAは悲鳴をあげる暇もなく地面へと倒れこんだ。

「・・・今のお前、メツチャかつこいいんだけど・・・」

登場といい、技といい・・・ずるいよ!おいしいところもってつて!」俺は激怒した。

「まあまあいいだろ、それより車に乗りに行くぞ」剛は俺達を軽々と担ぎ上げて車のほうへと運んでいった。

NO.39「死にかけてるところで助けにくる人ってかっこいいよね」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.40「ポリリズムは世界を平和にする」

「さてと、車の鍵を貸してくれ」剛は俺達を地面に下ろすと、姫から鍵を受け取った。

そして俺と姫は車内へ、黒澤と下田は荷台へと乗った。

「じゃあ出発するぞー」剛はエンジンをかける。

ブロロロロ・・・という鈍い音を立て、車のエンジンがかかった。

「おい下田、旭山達は今どこらへんだ？」俺は無線で尋ねた。

「まだ埼玉県内にいる。だんだん北へとあがっているようだ・・・」

下田は言った。

「なるほど。飛ばしていけば間に合うな！」剛は思いっきりアクセルを踏んだ。

軽トラは勢いよく学校を飛び出して進んでいく。

途中にAKUMAが追ってきたりしたが、さすがの奴らもこのスピードには追いつけない。

「あいあい、ちよつと運転が荒いんじゃないのか？」

「こつでもしないと間に合わないだろ」

「黒澤、大丈夫か？」

「本を読むのには支障が多少ですが問題ありませんオウエエエエエエエ」

「問題おありじゃねーか！もろ口から胃液でてますけど？」

「なんかシチューみたいなんですけど？もう本は読むな！」

「おい黒澤、俺にかかっているんだけど・・・」下田は言った。

「ああ、すみません」

「まあクリーミーで美味しいからいいんだけどね」

「そういう問題じゃないよ！なんで食べてるんだよ！

確かにシチューみたいって言ったけど、たとえば話だから！ただのゲだから！」

俺は疲れている体に鞭を打ってツッコミを入れた。

「紅蓮、姫、ちょっと疲れてるだろう。寝てていいぞ」剛は気を遣ってくれた。

「ああ、ありがとう。なんか曲かけてくれないかしら」姫は目をつぶって言った。

「おいおい、どうせ鬼瓦先生のなんだから演歌とかそんなもんだろ」俺は笑って言った。

「じゃあこれでもかけてみるか」剛はCDを挿入した。少し動かなかつたが、剛が軽く叩いたらCDがかかった。

「ポリリズム ポリリズム リズム リズム・・・」

「どんな趣味してんだよ！」俺は疲れを忘れ思わずツツコンでしまった。

「まあこれでいいんじゃない？ほら、楽しそうよ」姫は後ろを指差して言った。

「ポリリズム ポリリズム」黒澤と下田が立ち上がって踊っている。

「お前らもどんな趣味してんだよ！しかもなんで完璧に踊れるんだよ！」

「ツフ」

「ドヤ顔すんな！」・・・ハアハア・・・体力を消耗しすぎた。

「おい！AKUMAが正面にいるんだが！」剛は言った。

俺が目の前を見ると、大量のAKUMA達が道をふさいでいる。

「やるしかないな！剛！窓を開けてくれ！」

「わかった！」剛はスイッチを押し窓を開けた。

俺は右手を窓から外へとだす。そして、右手から長い炎の刃をだした。

「邪魔なんだよお！！！」俺達の手がAKUMAの大群を横切ろうとした瞬間、

あの曲のサビがきた。

「くり返す」このポリリズム」

「くっ！集中できない・・・」俺は目をつぶり集中力を高めた。

曲がだんだん薄れていく・・・

「今だ！」俺は目を開け右手を振ろうとした。が、そこに待っていた光景は・・・

「くり返す〜 コノポリリズム」

「お前らも歌うのかああああ！！！！！！」俺は今世紀最大のツッコミをした。

そして俺は最後の力を使い果たし、意識が無くなった・・・

NO.40「ポリリズムは世界を平和にする」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.41「残された一つの希望の道」

「……おい……紅蓮！」

「……ん？」俺は剛の声で目がさめた。

「AKUMAはポリリズムの力で退けられたよ」

「そんなポリリズムは強力だったのか」俺は改めてパ　ユームの力に感心した。

「んで、今どこら辺なんだ？」

「もう埼玉県を抜けたところだ。あいつらはこの先2kmのところにいるらしい。」

こっからはもつとスピードを上げていくぞ！」剛は更に大きくアクセルを踏んだ。

「さてと、俺もだいぶ回復したかな……」俺は人差し指から炎をだした。

だいぶ安定して炎をだせる。これならレベル3くらいのAKUMAに傷をつけることはできそうだ。

「私もだいぶ調子がよくなったわ」姫は髪から電気を流して言った。しかし姫は一度魂の開放を発動している。

もしも一度開放をすると生命力が0になり、体の毛穴から大量の血が吹き出して瀕死、最悪の場合は死もありえる。

「開放だけは絶対に使うなよ」俺は姫に一応念を押ししておいた。

「わかってるわよそんなこと。使わなくてもあんな奴ら瞬殺よ！」姫は笑って言った。

こいつの自信はいつたどこからでくるんだろう。俺はそんなことを考えていた。

「もう見えてきたぞ。あれがAKUMAの軍だ。」剛が指を指した方向には

車に乗っている大量のAKUMAがいた。その車にひとつだけ豪華

な飾りをしたものがある。

「きつとあそこに旭山達がいるんだな」俺はそう言い、姫と軽トラの荷台へと移動した。

「黒澤！一発やってくれ！」

「わかりました。幻想イマジン・ワールドノ世界！」

黒澤の目が光り、周りに霧ができた。霧はAKUMA達を包み込む。

「ナンダ？」AKUMAは俺達に気付いた。

「もう遅いですよ。」黒澤はそう言い、本を閉じる。

それと同時にAKUMAの刻印が霧によって粉々に砕かれ、刻印を壊されたAKUMA達はボタボタと車から落ちていく。

「敵ダ！能力者ダ！作戦A実行セヨ！」

豪華な装飾をした車に乗っているリーダーのようなと叫んだ。

すると、周りの車からレベル3のAKUMA達が次々と地面に落ちた。

「コレヨリ先二八行力セナイ！」巨大なAKUMA達は道をふさいだ。

「っち！」俺は右手を構えた。しかし剛は運転席から怒鳴って言った。

「こいつらを倒すことは考えるな！今はあの車を追うことだけを考えろ！」

「でも無理だろ！こいつらが邪魔で道路は進めない！」俺は言い返した。

「・・・ん？道路は進めない？」

その瞬間、俺はこの危機を回避する方法を思いついた。

「空だ！道路が無理でも飛ばせばいける！」俺はそう言った。

「でも一体どうやっていくと言うのよ！」姫は言い放った。

「剛！あいつらの前に大量の水をまいてくれ！」

「わかった！」剛は水をAKUMA達の前に巻いた。

「何ガシタインダ？」AKUMAはニヤニヤ笑っている。

「こっするんだよ！！」俺は右手に最大火力の炎を宿し、

NO.41「残された一つの希望の道」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.42「第二の壁」

「いけええええ!!」俺達の車は蒸気の力で浮いて、AKUMA達の頭の上をとんだ。

「ナニ!?サセルカ!」レベル3のAKUMA達はその巨体を生かし、

車にしがみつこうとしてきた。

「邪魔です」黒澤は霧でAKUMAの巨大な腕を切り落とした。

「ウガアアア!!」腕は骨ごと切り落とされたので、修復はできないようだ。

そうして俺達はAKUMAの壁を乗り越え、地面へと着地した。

「スピードアップだ!」剛は車のスピードを上げた。

「何ヲシテイル!」

「スイマセン・・・次コソハ!」次はレベル2のAKUMAを落としてきた。

「どうやらさっきのAKUMAより強いのはいないらしいな・・・」

俺は言った。

「ならこんな奴ら敵じゃないわよ」姫は笑って言った。

「ソイツハドウカナ?」AKUMA達は道を塞ぎ、斧のような手を広げ回転し始めた。

すると、奴らが刃物のようになり、まるでシュレッダーのようになった。

「このままつっこんでいったら車がバラバラにされちゃうわ!」姫は焦りながら言った。

俺は悩んだ。

もしももう一度上に飛び上がったとしても、

あいつらが移動したらジャンプの意味がなくなってしまうからだ。

なにかいい策はないか・・・俺は考えた。

「・・・やっぱり殺すしかなさそうだな」俺は右手を奴らに向けた。

「炎砲弾！」フレイム・キャノン 炎の弾は右手から勢いよく飛び出した。

そしてAKUMAに直撃した。しかし、
炎の弾は回転してる奴らの腕に当たって、傷をつけることもなく消滅してしまった。

「つく！こんなんじやダメなのか！」俺はとうとう挫折してしまっ
た。

「なんとかしてあの鋭利な手を吹き飛ばせれば……」

「ん？まてよ……所詮鋭利とはいつても体の一部に過ぎない。
付け根から切り落とせたらどうだろうか……しかし、どうやって？

「……わかつたぞ」俺はニヤリと笑って言った。

「どうやってもこんなの突破できないわよ！」姫はイライラしながら
ら言った。

「よく考えてみるよ。あの斧のような手が危険なんだ。

なら切り落とせばいい」

「でもあんな回転しているのにどうやって切り落とすというの？」

「嬉しいことに相手はもの凄いですピードで回転してくれている。

あの硬い斧のようになった手の所じゃなくて肩の付け根に刃物をか
ざしたら……」

「あいつらの回転の勢いでこっちから何もしなくても腕が落とせる
のね！」

「そうだ！これは俺と姫、そして黒澤にしかできない事だ。

頑丈な刃を能力で形成し、あいつらの腕を切り落とすんだ！」

「わかりました。その作戦に賭けてみましょう。濃霧刃！」ディープフォッグ・エッジ

黒澤は霧を集め、できるだけ圧縮して一本の頑丈で鋭利な刃を形成
した。

「次は私よ！雷双刃！」ライトニング・ツインエッジ

姫の手に雷の双剣が現れる。

「やっぱこれが一番扱いやすいから私はこれでいくわね」姫は剣を
構えて言った。

「最後は俺だな・紅蓮刃！」ヘルフレイム・エッジ

俺は手のひらを合わせ、伸ばしていく。

意識を高め、刃を形成する際の炎の火力を最大限まで上げた。すると、今までにないほどの高純度の刃が完成した。

「これならいける！黒澤、霧で俺達をAKUMAの場所まで移動させられるか？」

「お安い御用です」

「よし、今から黒澤の霧に乗ってAKUMAの所に移動する。移動したら刃を肩の付け根あたりにつきたててくれ。

こっちの刃が勝てば、腕を見事に切り落とせる。

もし失敗したら・・・俺達は回転に巻き込まれてミンチになる」俺は言った。

「そんなもんなるはずないじゃない！あいつらをミンチにしてあげるわ！」

「よし！じゃあ行くぞ、黒澤頼む！」

「わかりました」黒澤がそう言うのと俺達は霧に乗り、荷台からAKUMAのほうへと向かっていった。

「もげるおおおお！！」俺達3人は刃を肩らへんにつきたてた。

「ソナモンニ負ケナイ！」AKUMAと刃は接触した。

たくさん火花が散る。しかし、数秒するとAKUMA達は悲鳴を上げた。

それと同時に腕が吹っ飛んだ。

「よし！剛！今のうちに抜ける！」俺達は霧に乗って、一瞬で軽トラの荷台へと移った。

「おう！」剛はアクセルと強く踏む。

俺達はAKUMAの第二の壁をぶっ壊し、旭山達の乗ってると思える豪華な装飾をしている車の横に移動した。

「いいか！俺達は今からこの車をぶっ壊し、旭山達を救出する！」

NO.42「第二の壁」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.43「AKUMAの能力」

「今から旭山達の救出に向かう！」

「どうやって救出するの？」姫は聞いてきた。

「車が動いたままでの救出は厳しいな・・・なんとかして車を止められないかな」

「なら私に任せて！いい作戦があるの」姫をそう言い、指に帯電した。

姫は指をあいつらの車のタイヤへと向けると、電気を放った。

電気はタイヤに直撃すると同時に、タイヤに穴を開けた。

「グワ！一体ナンダ！」運転しているAKUMAはすぐに体勢を立て直した。

「まだまだよ！」姫はもう片方のタイヤに電気を放った。

すると、片側のタイヤがパンクした車はバランスを崩し、その場に止まった。

「今だ！全員降りろ！」俺達は軽トラを降り、奴らの車へと駆け寄った。

「人間ゴトキガ・・・フザケルナ！！」そう言う声と共に、運転していたAKUMAが降りてきた。

「旭山達は・・・どこだ！」

「誰ダ？・・・アア、アノ人間ナラモウ闇桜島へと送ッタヨ」

「嘘をつくな！確かにこの車に反応がでている！」

「アヒヤヒヤヒヤヒヤ・・・見事ニ騙サレテクレタナ」AKUMAはニヤリと笑って言った。

「どういうことだ・・・」

「俺達AKUMAハレベルガ5上ガルゴトニ能力ヲ覚エルンダ

ソシテ俺ノ能力ハ『追跡止め』ダ。

ツマリ場所ヲ特定サセル能力ニ嘘ヲ教エテ、追跡ヲサセナイヨウニスルンダヨ」

「くそ！俺達は最初からこいつに騙されていたのか・・・」

「まあいいわ・・・こいつらを殺せばスッキリするわよ」

「オイオイ、随分トナメラレタモンダ・・・」AKUMAはそう言う
と全身に力を入れ始めた。

メキメキメキ、という音と共に筋肉が先程とは比べ物にならないほど膨張した。

「ドウダ！」奴は姫にパンチをした。

「きゃあ！」姫は悲鳴を上げて動くことができなかった。

「お前はさがってる」俺は姫に奴の拳が当たる瞬間に炎の刃を形成し、

拳を刃で受け止めた。

「ホウ、ワシト力比べカ！！」奴は再び力を入れる。筋肉が更に膨張した。

「つぐ！！」俺はなんとか刃で受け止めているが、それが精一杯だ。

「隙ガアリスギダ！」AKUMAは反対の手で俺の腹を殴ってきた。

「そんな簡単にやられるかよ！」俺は反対の手からも刃を形成し、受け止める。

「ソレガ甘イ！」AKUMAは俺の刃を握ったと思うと、粉々に割ってしまった。

そして、奴のパンチが俺の腹に直撃する。

「ぐはあ！」俺は吹き飛んだ。

「マダマダ！」AKUMAは接近してきた。

「こいつ、速い！」俺は再び刃を形成すると、向かってくる奴に向かって振りかざした。

「後ロダ！」AKUMAは俺の後ろへと周り飛んでいた。

「死ネエ！」AKUMAは俺に蹴りを入れた。

俺は地面へと叩きつけられた。

「紅蓮！」姫は叫んだ。

「・・・だからお前はさがってる！！」俺は立ち上がった。

「ソナ体デ何ヲスル！」AKUMAは笑いながら言った。

「こっするんだよ！魂の開放！」その瞬間俺の背中には大きな龍のマークが刻み込まれ、
全身が灼熱の炎の中へと包まれた。

NO.43「AKUMAの能力」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.44 「漆黒焰帝」

「今までやられた分、仕返ししてやる！」俺は足から炎を噴射した。一瞬でAKUMAに接近すると同時に、右手を奴の腹に押し当てた。
ヘルフレ임・スレンドリル
「焰螺旋削！！」

俺の右手に全身から放出されている炎が集中し、AKUMAの腹に風穴を開けた。

「コレハ強烈ダナ・・・」AKUMAは再び体に力を入れ始めた。すると、周りの筋肉が膨張し、風穴をふさぎ、傷が回復してしまつた。

「さすがはレベル5だな」俺は言った。さっきいから武者震いが止まらない。

命をかけた戦いをしているというのに、なぜだかわからないが無性に楽しいのだ。

「ドウシタ？震エテルゾ」

「ああ。なんでだろうな・・・楽しくてしょうがないんだ！」

「アア、俺モコンナノ初メテダ・・・モット楽シモウゼ！！」AKUMAはそう言うと、

右腕に力を入れ始めた。すると、右腕がどんどん肥大化していく。そしてハンマーのようになつたその腕で俺に攻撃をしてくる。

「吉！」AKUMAは腕を振りかざしてきた。

ヘルフレ임・エツジ
「紅蓮刃！」俺は手のひらを素早く合わせ、

刃を形成して奴の攻撃を受け止めた。

「弐！！」AKUMAはもう一度腕を振りかざしてきた。

今度はさらに一回り腕が大きくなり、重量感が急激に増えた。

ヘルフレ임・スレンドリル
「つぐ！焰螺旋削！！」

刃だけで支えきれなくなつた俺は右手に全身の炎を集め、奴の腕を受け止める。

「ホウ、ナカナカヤルジャナイカ」

「お前もな！！」俺は炎の火力を上げた。

「グワアアア！！」俺の拳が奴の骨をくだきながら風穴を開けた。

「どうだ！これでお前の腕も使い物にはならなくなったぞ！」

「フフフ・・・甘インダヨ！」奴は笑いながら腕に力を入れる。

メキメキメキという音と共に、また筋肉が風穴を修復し、更に腕が肥大化した。

「なぜだ！？骨は確かに砕いたぞ！！」

「確力ニ普通ノAKUMAナラ修復不可能ダロウ。シカシ俺ハ違ウ。普通ノAKUMAハ傷口ヲ筋繊維ヲ使イ、裁縫ノヨウニツナギトメテ修復スル。

シカシ俺ノ場合ハ、筋肉痛ト同ジヨウニ破壊サレタ筋肉を他ノ筋肉ガ覆ウヨウニシテ修復スルンダ。

ダカラ骨ハ砕カレタガ、筋肉ヲ修復スルコトガデキルンダゼ！」AKUMAは笑って言った。

「くそつ！！・・・やはり刻印を破壊しないといけないか・・・」

「ソレハ無理ダ！参！！！」AKUMAは俺の背後へと回っていた。そしてあの巨大な槌のようになった腕が俺に振り落とされる。

「ぐはあ！！」俺は不意をつかれ、受け止めることができず、地面に叩きつけられた。

「トドメダ！拾！！！！！」AKUMAは再び腕に力を入れる。

すると筋肉が鋼のように硬くなり、鉄の塊のようになった。

「死ネ！！」奴は俺の頭に腕を振り落とす。

「どうやら俺も覚悟を決めないとな・・・」俺は立ち上がり言った。

「モウ遅イワ！」AKUMAの腕は俺に当たる寸前だった。

「この技をやれば右手が吹っ飛ぶ可能性があるから使わなかった・・・」

でも、今しかない！！」俺は手のひらを合わせた。

「同ジ技ジャナイカ！！」

「こいつはちよっと重いぜ！！」俺は手のひらを伸ばした。

すると、いつものように左手に刃が形成された。

俺はその刃で右手を斬る。すると傷口から漆黒の炎が吹き出してきた。

そしてその炎が刃へと変わっていった。

「失せる！漆黒焰帝！！」
ブラッディ・フレイムエンペラー

俺は漆黒の刃でAKUMAを切り裂いた。

「・・・グ、無念」AKUMAのハンマーのような腕が吹き飛び、同時に刻印も粉々になっていた。

「紅蓮！すごいわ！」姫はかけよる。しかし、俺はそのまま地面に倒れこんだ。

「紅蓮！！紅蓮」

俺は闇の中へと落ちていった・・・

NO.44「漆黒焔帝」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

NO.45 「悲愴の炎」

「紅蓮・・・紅蓮！・・・紅
えなくなっていく。 「 だんだんと姫の音が聞こ

ここはどこだろうか。俺は海底へとゆっくり沈んでいく。

しばらく息をすることを忘れていた。しかし、苦しくなって俺は上へと必死に上がろうとする。

すると、海の底から黒くうごめくものが俺の足を掴み、引きずり込もうとする。

「何だ！？」俺は黒くうごめくものをじっと見た。

腕だ。そこには無数の腕があり、俺の体に必死にすがりついてくる。

「やめろ！！」俺は必死に抵抗をした。なかなか離れない。

俺はだんだんと苦しくなっていく、もがくこともできなくなってしまう。

すると、無数の手の中から声が聞こえた。

「助・・・ケテ・・・」声はだんだんと増えていく。

「助ケテ・・・助ケテ・・・助ケテ・・・」

「やめろ・・・やめてくれ！！」俺は耳を塞いだ。しかし、声は絶えず聞こえてくる。

その時、俺の脳裏に綺麗な青々とした海と島の景色が流れ始めた。

その島は草木が生い茂っていて、この現代には想像もできないような景色だった。

その島にはいくつかの集落があった。そこに人がすんでいるようだ。

「おい、帰ったぞー。たくさん魚が釣れたぞー！」

「あら、凄いいじゃない！みんなにもわけてきましようよ」

二人の夫婦は魚を抱え、色々な家へと魚を渡しにいった。

「なんていい村なんだ」俺はこの自然と共存して暮らしている村に

感動していた。
すると、いきなり景色が変わった。

「これで新型兵器が完成する……」

そこはなにかの研究所だった。男は培養液になにかの細胞を入れて、観察している。

そして、それを大きな水槽のような機械にセットした。
機械が作動し、機械から煙が出始めた。

そして煙が止まり、機械のドアが開いて中からなにかがでてきた。
それはAKUMAだった。

「これで完成だ!!おい、今から村人を殺して来い!」

「カシコマリマシタ」AKUMAは研究所を飛び出していった。

「なんだ……これは……」俺は目の前におきた事が理解できなかった。
また景色が変わる。

そこは先程の島の景色だった。しかし、集落が完全に破壊されており、
人間が一人としていなくなっていた。

「一体どうしたんだ!?まさか……」俺の予想は的中した。

AKUMAが集落を破壊し、人間を殺しているのだ。

「やめろ!……助けてくれ!」

「殺スノ……楽シイ!!」AKUMAはどんどん人間を殺していく。

そして殺した後、人間の頭に噛み付いた。

AKUMAは頭蓋骨を粉碎し、脳に穴を開け、なにかを脳へ流し込んだ。

卵だ。そして、その人間は何事も無かったように立ち上がった。

次の瞬間、体中の皮膚が剥がれ落ち、AKUMAへと変態した。

これがこのAKUMA大量発生の原因である。

そして、この島こそ・・・『闇桜島』なのである・・・

その瞬間に景色が戻り、またあの声が聞こえ始めた。

「助けテ助けテ助けテ助けテ」声と共に、引きずり込む力も強くなってきた。

しかし、俺は抵抗をすることも無く吸い込まれていった。

そして、腕の中へと入っていった。

「お前ら・・・辛かったんだろ・・・」俺は涙を流しながら言った。

そうすると無数の腕は引きずり込むのを止めた。

「辛いんだろ・・・まだ人間でいたかったんだろ」

「ソウダ・・・ソウナンダ」なかから声が聞こえる。

こいつらは闇桜島でAKUMAに殺され、AKUMAにされた人間達なのだ。

「もつと生きたかったよな・・・でも俺はAKUMAを殺さないといけない」

「ヤメテクレ・・・」

「・・・でもこれだけは誓おう。」

俺はお前らがAKUMAになった原因を作り出した奴を絶対に倒す！

そして・・・AKUMAになったお前らを・・・愛そう」

俺がそう言うと、腕が俺を抱きしめてきた。

「アリガトウ・・・我々ノ命、貴方ト共・・・」

俺の右手に無数の腕が吸い込まれていく。

そして強烈な光が俺を包み込んだ。

そして、俺は目を覚ました。そこは荷台の上だった。

「よかった！・・・目が覚めたのね」俺はどうやら姫の膝の上にいるようだ。

「ああ、もう大丈夫だ。」俺は起き上がった。

そして、右手を見た。

そこには黒い色の十字架のマークが刻み込まれていた。

「我々の命、俺と共に、か・・・」

俺は拳を握り決意をした。絶対に研究者を潰す、と。

NO.45「悲愴の炎」(後書き)

感想・評価お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885y/>

学校戦争！

2011年12月11日17時53分発行